
俺、不器用ですから

上条信者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺、不器用ですから

【Nコード】

N5852X

【作者名】

上条信者

【あらすじ】

これはこの前消去された小説を再構成したものです。

正直あらすじ書くのめんどくせえ。

主人公は変態というかダメな方向に強烈です。

そんな主人公が救世主（笑）として異世界（笑）に召喚（笑）されて結構自由に動きつつ最近のはやりの異世界転生物を嘲笑う物語です。

お前、飯食わせてくれたのに裏切っちゃダメだろ？

戦力として呼んだのに戦力として使われないでどう扱われると？

人とかデストロイできるようなDQNが元の世界でまともな奴なわけねーだろワロスWWW
多方面に喧嘩売りますが、互いに罵り合いながら感想を言い合える
といいなあ・・・と思っています。

短編の続きという名のプロローグ

「どうも、救世主です。給料頂く為に馬車馬の如く働きに來ましたこんちくしょう」

「グルルルル・・・」

「息くせえよトカゲ野郎。あ、嬢ちゃん危ないからその人に避難させて貰ってね」

「え・・・？」

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「!？」

「ほら、お前やっぱ鍛えた方がいいってメタボさん」

「デブの矜持としてそれは無理っす」

「だって一瞬俺殴りとばしそうになったもの」

「ほら、そこは逆に考えるんだよ。デブだから変態なんじゃない、変態だからデブなんだ」

「よくわかりました変態」
ロリコン

「ごめん！間違えた！やり直さしてマジでっ!!」

「すいませくん、被害者にもう一人追加で」

「いやあああああああああああああああああああ
ああああああ！」

「え？
・
・
・
・
え？」

「ワロス
W
W
W
テラ
ワ
ロス
W
W
W
」

「あ……あなた……達……は？」

「あれ、最初言わんかったっけ？」

「救世主（笑）」

「やめて、今思い出すと自分でもイタイと気付きましたマジすませ
 ンした救世主さん」
 ロリコン

「死ねえ！」

「あぶっ!？」

「あ、避けるなんてなんて奴だっ！」

「黙れ！人に死ねとかどんな教育受けてんだこの厨二のDQNがつ

「僕よりひどい奴なんてこのサイトごろごろ転がっているだろう！？」

ロマンチックなだけが恋ではありません。本物の恋とは、オートミールをかき混ぜる行為のように平凡で当たり前なのです。――――

――――ロバート・ジョンソン

まなべ くとつ
間部功刀「つまりお前ら恋愛経験皆無なの透けて見えるからヒロインの書き方は考えろよってことだ」

メタボさん「君も結構ざっくり行くねえ……。てか僕メタボさんじゃなくて長谷部大治^{はせべ たいじ}なんだけど」

「まさかオープニングに900文字近く使う事になるとは……………」

あ、ども。初めての人はこんちにわ。なんか見覚えあるな〜と言う人はお久しぶり。

まなべくとう
間部功刀です。

いや〜、まさか運営側の陰謀で消去されるとはね。

歌詞の無断転載だって、今度は「〜♪〜♪」って表現しときゃ大丈夫だよ。

ケケケケケケケ・・・。

え？訳がわからないって？

そりゃあんた、楽屋落ちだもん。

分からせる気ねーもん。

そんな訳で新生「俺、不器用ですから」が始まった訳ですけども、今回ブログということでのこの空間、派手にしっちゃかめっちゃかにやらせていただきます。

つまり、スーパ―俺タイム。

フヒヒ W W W W W W W W W W W W W W W W

「盛大にメタってるところ悪いけど、このトカゲ処理しちゃわないとこのサイズの死体邪魔だぜ？」

「あれ？これも俺達の仕事なの？」

「あったり前でしょう。ナマモノ生物なんだから死体も残るし、放っておくと疫病もでちゃうんだよ。戦後処理までが散々暴れた俺達の責任です」

「ですよねー」

そんな妄想は目の前の現実には打ち崩された。

いつも疑問に思ってたんだけど、モンスターの処理ってどうしてんの？

放置？それともある程度処理したりすんの？

現代日本とかは道路で猫とか死んだりすると役所の人とかが処理してくれる訳だけど、ファンタジーは大体中世ヨーロッパ設定が多いからそこら辺の描写曖昧だよな。

俺達の世界だと近代ヨーロッパ並み。

モンスターの死体とかによる疫病うんぬんは流石に処理するけど道とかにはうんことか落ちてるレベルだな。

俺の国は違うけど。

メタボさんの国は結構そういうことあるっぽい。

奴隷とかゴミ問題とかな。

「ま、大体は焼却だけど、こいつどう見てもファイアドレイクだよ……」

「火属性か……、しかも火山地帯からどうやってこんなところに」

「ここ山地だから洞窟とかあったんじゃない？」

「溶岩にも耐性があるんじゃないや焼却できるかわからんね……」

「こっちには創世の魔神だけど、魔力ほぼからだからなあ……」

「……（ピクピク）」

普段はふるさいのにさつきからまったく喋らない魔剣、レーヴァンティン。

ちなみに命名俺ね。

……ま、自分でも厨ニくせえ……って思うけどさ。

ちょうどラグナロクオンラインやってたからちらっと思い出しちゃって。

だって、だってさあ！

神話とかメツチャ好きやし！

男なら炎の魔剣ときて神話級って考えたら誰でも思い付くよなあ！？
だから俺は痛くない、まだ普通まだ普通。

「普通の人間はお前の年頃で厨二病になりません」

「ゴハッ!!」

やるなメタボさん、まさか地の文に普通に突っ込んでくるとは。

「あ、あの……」

「ん？」

「フヒッ？」

背後から誰かに話しかけられると、そこにはプロローグで涙ポロポロ流していたお嬢ちゃんが立っていた。

「……んだよ」

「バカ、萎縮させちゃうだろう。どうしたの、モンスターなら僕達
がもう退治したよ？」

「……ありがとうございました、みんなの仇をとってくれて」

「……」

「……」

めんどくせえ……。

堪らない程にめんどくせえ……。

「できること少ないですけど、お礼はなんでも」

「だってよ、メタボさん」

「そうだね、クトウくん」

「……?」

やれやれと首を振る俺とメタボさんに怪訝な表情になる少女。

「「」どうでもいいからとっとと失せろ」」

「ッ!？」

「別に俺達お前らの復讐の為に戦ったわけじゃねーし」

「お仕事だしね、給料もらってるから君達がだせる程度の報酬貰っても割に合わないし」

「・・・・・・」

俺達の遠慮ない辛辣な言葉の数々に、少女は信じられないといった表情だ。

余程のショックだったのか、その場にペタンと膝をつく。

俺達は彼女に背を向け、ファイアドレイクの死骸を処理するために正面に見据える。

「「だからさ」」

「お前もって泣いていいんだよ」

「ありがとうとかそんなこと言わずに、なんでもっと早く来てくれなかったんだって責めればいいのさ」

「ッ!?!？」

少女が背後で息をのむのがわかった。

だけど俺達はそれを無視して、さらに言葉を重ねた。

夕暮れ、俺達は到着したルカ子たちが瓦礫の下から死体や遺品を回収しているのを眺めながら腰を落ち着けていた。

廃墟、そういう風景だった。

最近の記憶だと日本でもあの地震が有名だが、当事者である分その認識度が半端なかった。

自衛隊の人とかはいつもこんな風な気分なんだろうかと思った。

「いやー・・・ビビったな」

「転移してきたらいきなり目の前火の海だったしな」

どちらともなくポツポツ話し始める。

その言葉には力も無く、ただ呟いているだけと言った感じた。

「なんで俺達こんなことやってるんだろうな」

「救世主だからだろ？」

「あーだったな」

「勝手に呼んどいて何ほざいてやがんだって思うけどねー・・・」

幾度となく疑問に思ってきた事だった。

なんで俺がこんなことを。

ふざけんな、こんなの奴隷と変わらない。

辛い、痛い、やめたい。

「けどよお・・・んなこといっても結局変わらないんだよなあ。国に属そうが放浪しようが、この事態に出会ったら多分見捨てなかっただろうしなあ・・・」

「だねえ・・・」

「まあ・・・だから、なんだ？仕方ないからさ、やるしかねえだろ・・・やるしかないんじゃないっすかねえ！」

んーと背伸びをしながら立ちあがって言うと、メタボさんも隣立ってニヤツと笑った。

「お前やっぱすげえわ」

「そうか？」

「うん、すげえ」

んな褒められつと照れるなおい。

「んじゃ、行きますか」

「行きますかあ」

これは、救世主達の物語。
理不尽で、傲慢で、冷酷で、卑劣で、無常で、不浄で、暖かく、和やかで、やさしく、オチも山も記録すら残らない、ただの物語。

短編の続きという名のプロローグ（後書き）

だいたいこんな作風。

「あああああ！ごめんなさいごめんなさい！」

人生は教師である。そこでは幸福より不幸の方が良い教師である。

リーチエ

フ

クトウ「せんせー、この場合は幸福なんですか不幸なんですか」

ルカトエーゼ「安心してください。間違いようも無く不幸です」

クトウ「でっすよねー」

「♪♪」

今の気分を現わすなら『flay away』になる。

正に飛んで行きたくなるような気分だろうか。

どうも、間部功刀^{まなべくどう}です。

今年で16になるティーンエンジャーだ、つか高校生だ。

高校生といったらラノベとかネットとかじゃ異世界にトリップした

り転生したり召喚されたり救世主になったり勇者になったりモンスターになったり兎に角夢あふれてハッピー☆な世代。

そんな俺が今置かれた状況は正にパンストなみぶっ飛んでいると言っている。

何せ召喚だ、しかも救世主らしい俺。

実に俺の感性を刺激してくれる。

故に今の俺のテンションは上々、フルスロットル。

今大理石の床っぱいものの上を歩いているのだが、俺の後ろを一人の少女が息を切らせながら小走りしている。

彼女の名前はルカトエーゼ・フォン・レーネンブルグ、王宮上級魔導管理官という実に俺の感性を震わせてならない人物だ。

もちろん日本に王宮魔導管理官なんて役職は無い、型月みたいに隠れてる人はいるかもしれないけど、後イギリスとかにも居そうだな。

そして俺の魔法使い像を裏切らぬ身の丈よりデカイ杖を持ち歩くその姿に、この場所が地球ではない、もしくは俺の人生の常識を超えた世界なのだと実感させた。

だってあんなかつこ俺なら死にたくなるね、憧れるけど。

ほら、ファッション雑誌のモデルの服装を真似て鏡で見たら似合わなかった時の感じと似てる。

・・・・あれは、ひどい事件だったな。

酷い事件と言えば俺がこの世界に召喚された時の話も酷い。

あれは多分一生誰にも離せない。

放課後の帰り道だったんだが、いつも通りバイトに向かおうと道があるいていると突然謎の穴が俺の足元に出現した。

予期せず現れた穴に俺は脚を突っ込んでしまい、抵抗も出来ぬ間にゾプゾプと呑み込まれていく。

『な、なんだこれ！？ 妙に何かに這いずりまわっているような感覚が気持ちいい！？・・・・あっ（ビクンッ！）』

あんなの反則だろjk・・・。

重点的にナニを狙ってくるなんて、なんてゲートだちくしょう。

お蔭で召喚された時下着の着替えが無いか聞いたら目の前の魔女っ子に（　。　。　。　）って顔されたよ。

そんなこんなで途中でテンションが上がって冒険にでかけようとしたら魔女っ子の杖が顔面に突き刺さり悶絶したりといろいろあったが、現在俺はこの国の王様がいるという謁見の間とやらに向かっている。

定番だよね、「魔王を倒してくれませんか？」的な？

どうせはい／いいえのどっちを選んでも“はい”しか選べないんだろうけどね、ゲーム的にも現実的にもな。

・・・まったくふざけてやがる。

俺こういうのを自主的にやるのはいいが強制されるのは大嫌いなんです。

せっかくのファンタジーをそんな現実で汚したくない！

現実はまだ沢山なんだよ！

妹が俺のエロゲの趣味趣向を全て把握してるなんて現実は大嫌いだよちくしょう！！

「なので失礼のないようにお願いしますね」

「え？　ああ、うんわかった」

いつの間にかデカイ門の前に到着していた。

魔女っ子が何かを説明していたようだが聞いてなかったので適当に返事を返す。

あ、しまった、分からない時はちゃんと聞き返せてバイトの先輩に怒られてたんだった。

すいません藤二さん、怒られると思ってとか素っ頓狂なこと言ってますいませんでした。

さて、自己紹介はインパクトが大事だからな。

とっておきの特技で自己紹介しよう、クラス会ではこれでドン引きされたが異世界ならまた違った反応が帰って来てくれるはず！

門が開かれた瞬間、猛ダツシュで中に入り歌い始める。

「♪! ♪!」

曲は伊藤由奈の precious。

海猿の主題歌な、そのサビ部分を熱唱しながら部屋の中央っぽいところまで走っていく。

そしてスライディングしながら天井見上げてガッツポーズ、つか天
上たけー。

まるで感極まったかのように涙声で熱唱しながらゆっくり立ち上がりラストスパート。

歌い終わった瞬間にポーズを決め、万感の拍手を待つ。

[illegible]

空氣が凍ったように動き出さない。

あれ？

あれえ？

この反応覚えがあるぞう？

なんだよファンタジー、大したことないな。

この程度で思考停止とはな！

・・・・・・・・・・・・・・・・すいません、おねがいですから
誰か喋ってください。

「あゝ・・・・・・・・えっと、あなた救世主、さん？でいいのかしら？」

「!!」

なんか一番奥にある王座っぽいところにいる少女が話しかけてくれた。

よくやった！アメちゃんあげるよ！

流石は幼女！君の純粋さに感動したっ！！

これ幸いと固まったままのポーズをとりカッコ付けた姿勢で自己紹介を始める。

「おぺっ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・噛んだ。

再び沈黙に包まれる謁見の間。

痛ましい物を見る目の王女様（仮）。

そして引くに引けずに必死にポーズをとる救世主（笑）。

・・・・・・・・・・・・・・・・死にてえ。

誰か俺を殺してくれよ。

「え、えゝ・・・っと、救世主様？、をお連れしました」

疑問形だよ！

もうすでに疑問形だよ！俺もそう思うけどね！

「え、ええありがとう、ルカトエーゼ。忙しいところを・・・」

「いいえ・・・」

ぎこちない会話が交わされている。

多分俺痛い子だ。

俺の扱いに超困ってるよこいつら。

死にたい。

こうなったら開き直ろう。

そうだよ、そうするしかねえよ。

良く見れば2人とも美少女じゃん、テンションあがる・・・・・・・・、

目が・・・・・・・・、クラスの女子の目だ・・・・・・・・。

な、泣いてねーし！いじめられてもねーし！

なんだよクソ共！リアルなんてクソゲーだろうが！

まだファンタジーに席を置いてる俺は勝ち組みだろうが、だから俺は間違っていない。

「おい、お前ら」

「・・・・・・・・はい？なんででしょうか」

王女様に作り笑顔で返された。

「早く話を終わらせて俺を開放してください」

これ以上は耐えられない。

「あ、はい。ええっと、まずはようこそ、ハイ・エウルへ。勝手ながら、救世主様のお力をお借りしたく召喚させていただきました」

「こんな痛い子に敬語使わなくていいっすよ、むしろ罵ってもらった方が・・・・・・・・」

「そんな訳にもいきませんよ、形式的に。そのほうが楽だけどね。さて、あなたを呼んだのには理由があるんだけど、・・・・・・・・なぜか謁見の時間に大幅に遅れててきちゃったからもう時間がないのよね」

なんかすいません。

「という訳でこの国への最低限の保険だけでもお願いしたいんです」

「ん？保険？」

この言葉あんまり好きじゃないんだけどなあ。
やっぱ国としては救世主なんて代物が害をなさないようにしたいのか？

「因みに拒否権は」

「無いわね。力づくでもやるわ」

「なるほど、そういうのは嫌いじゃねえよ」

この少女、ただの少女ではないようだ。

幼女なのにおそらく重要な俺への保険なんてものを任せられてるあたり実力はあるのだろうか。

何しろ人柄にも惹きつけられる物がある。

こんな感覚初めてだぜ。

はっきりした物言いい悪印象はない。

「……俺人の下に着くつてのはあんまり好きじゃないんだけどさ」

「ん？」

「あんたのことは嫌いじゃないわ。自主的にならいいぜ」

「ふふ……、視たとこ学生のようにだけど、なかなか見所あるわよ

貴方。流石は救世主ってことかしら」

「俺はヒーローになる男だからな」

互いに値踏みするように睨みあう。

おお、この感じいいわ。

敵じゃないけど互いが負けたくないみたいに思える感じ。

「……んじゃルカトエーゼ！儀式魔方阵を出しなさい」

「あ、はい！」

ちょっと唾然としていた魔女っ子、ルカトエーゼだっけ？

長いな、ルカ子でいいだろ。

いや待て、それだと某飛べよおおおおお！の科学シュミレーションと被る気が……。

ま、いいか。

ルカ子は俺と姫様の間に奇怪な式の書かれた布をバサッと広げる。

姫様がその中心に立ち、俺も招き入れる。

しゃがむように要求され、疑問に思いながらも俺は目線に合わせて膝をついた。

「んで？これからどうするんだ？」

「貴方はそのままでもいいわ。さて、汝我がペルムドンに忠誠を誓う以下略」

「なんだと」

チュ・・・。

くちびるが・・・おれにふれた。

目の前には目を瞑った姫様の小さな顔があり、唇には少し湿った感触が。

そこまで考えた時、下の魔方陣が強烈な光を放ち始める。

驚き立とうとした俺を、姫様は後頭部を掻き込みその唇を強く押し付けてくる。

一体何が起きているんだ。

やがて光が納まり、姫様が少し赤くなった顔をしながら俺から離れた。

「大したことないわね、キスってのも」

「てめえ俺のファーストキスになんて言い様だこのやろう」

その澄ました態度がムカついたのでデコピンしてやった。

するとキョトンした顔でおでこを押さえて俺を見つめる姫様。なんだ、謝らんぞ。

俺のファーストキスは貴様のような少女のためにあったのではない。

「ふふふふふふ、おもしろいわね貴方。気に入ったわ」

「そうかい」

「一応これで保険は終わりよ、何か質問はある？」

「あん？あー・・・そうだな」

「・・・冷静になって考えてみると、一番気になる不安があった。」

「・・・俺、元の世界に戻れんの？」

「解らない、としか言えないわね」

「・・・そっか」

「・・・何も言わないの？」

「それならそれで帰る方法探せばいいし、絶対と解るまではぜってえ帰って見せるね」

「そう」

やっぱこの姫様良いな。

不覚は聞いてこない、相手を気遣えるだけ俺は少し救われた。少なくともここに召喚されたことは悪くなさそうだ。

「んじゃ、そういうわけで俺はいくわ」

「ええ、部屋はルカトエーゼが案内してくれるわ。ルカトエーゼ、救世主様を」

「あ、はい！」

背を向け開かれたドアを通ろうとした俺に姫様の声がかかる。

「そうだ！貴方の名前！聞いてなかったわ！」

「………まなべ くとう間部功刀、俺の名前はまなべ くとう間部功刀だ！」

閉められるドアからちらっと見えた姫様の顔は、確かに笑っていた。
なんとなくまたテンションが上がった。

「よし！ルカ子、俺の部屋まで競走だ！」

「ええ！？また、勝手に！？」

曲は d o n ' t s t o p b e l i e v i n g。

「♪！♪！」

「ま、待ってくださいってばあ！」

ここから、俺の物語が始まった。

一話 こうして話は過去に戻る訳だが（後書き）

綺麗にまとめられたと思う。

二話　そ、そんな厨二を詰め込んだ世界なのか！（前書き）

矛盾点など随時募集

「えっ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・虐めるんですか？虐めるんですね？」

「ちげーよ。普通に情報収集に決まってるだろ。あんたらの言う事がホントかどうか俺には解らん訳だし、そこまで信用したつもりはねえよバカ」

「あ、そうなんですか」

「うん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん？って違いますよ！そんなことしなくてもちゃんと教えます！その為に今日一日貰ったんですよ！？」

「しらねーよwww」

「とことんフリーダムなのに妙に疑り深いですね・・・」

「そういう人生送って来たもんで。あ、違うわ。元来そういう性格なもんで」

「・・・・・・・・そうなんですか」

「・・・・・・・・少なくとも人のプライベートを見極めるくらいは人間

出来てるってところは信用してるけどよ、姫さんがすげー良い女だったし」

「えっ」

「いや、俺はロリコンじゃねえよ、シスコンだし」

「そ、そうですか」

「おいなんで目を逸らすおい。ちっ、まあいい、話は聞いてやるからとっとと部屋に案内しろよ」

「ええっ……」

「……んだよ、悪かったよ」

「あ、いえ、じゃあこっちです」

太陽が輝くかぎり、希望もまた輝く。

フリードリヒ・フォン・シラー

これまでのあらすじ。

俺、召喚。

この世界の説明、部屋で。

大体こんな感じ。

今、ルカ子さんが目の前の机の椅子を布団に座っている俺の方に向けていた。

結構真剣な表情してます。

こっちもそんな見つめられたことないからちよつと照れるぜ・・・。

「さて、どこから話しましょうか？」

「じゃあ、この国の事と大体の世間情勢かなあ」

他にも聞いておくべきことはあるが、まずはこれが解らんとどうしようもない。

情勢が解れば、なんで俺が呼び出されたのか解るしな。

「わかりました。ここは魔法が廃れきれず別の進化を辿る世界、ハイ・エウル。そしてハイ・エウルに存在する二つの大陸の内、主に人間が住んでいるのがこのグロウリアという大陸です。グロウリアは科学技術の発展で魔法の力が昔と比べ落ちてきていますが、人々は過去に消えゆく魔法を別の形によって残したのです。そしてグロウリアの中でも最東に位置し、魔の力が唯一残り続けている国、私達の住むペルムドン王国です」

トントン、と杖で床を叩くルカ子。

ほうほう、情報1、魔法が存在している。

これはさっき変な魔方陣っぽいので儀式を成されたので知っていたが、ここは特別その力が強いようだ。

情報2、ペルムドンつつーらしいな、この国。しかも王政か、時代設定やっぱ中世？

しかし科学技術なんて単語が出てきてるあたり近世っぽいな。

科学技術と魔法との合体か・・・胸アツだな。

「この国はもう一つの大陸、魔大陸エスノリスに近い為かマナが豊富で資源に富んでいます。生命の活動が活発で、巨大な樹海の中に存在しておりモンスターの数も非常に多く未開の地も残されているので、資源はあるけど人口が育ちにくい環境の国なのです。そのため昔から諸外国に狙われることが多かったんですけど、モンスターの多さと軍の精強さで未だこの国を荒らすことが出来た国はありません」

やばい、聞いたって何だが、テロップかなんかないと聞いてるだけじゃ訳分からなくなってきた。

メモ取りたいけど羽ペンはちょっと・・・。

そうこうしている内にもルカ子の話は止まらない。

そんなに俺の脳みそは高いレベルで作られてないんだよ！

英語苦手だよ！

ドイツ語はなんか発音がかっこいいから何個か単語知ってるけど！

さっきの話付いていけてますよ態度もフェイクだよバカ！

ゲーム脳だからなんとかわかったふりできたただだよちくしょう！

ああああああああああああああああああああああああああああ、や

ばいそんな早く話されたらマジで聞き取れない！？

うわああああああああああああああああああ！！！！

こうして間部功刀のルカ子異世界教義は本人の残念な脳みその容量オーバーにより、必殺聞いてるふりが発動された。

「と、いうわけなんです。わかりましたか？」

「うーんだいたいわかったー」

後半、マジで早回しのビデオテープみたいにしかな聞こえなかった。それでも必死に喰い付いたおかげか、聞き取れた部分は少ないものの何とか収穫できた。

曰く、グリムリバーなる存在していなかったはずの謎の大陸が現れ、そこから大量のモンスターがグロウリアを侵攻したそうナ。

古のモンスターからなる軍勢に、中途半端科学は役に立たず、諸国は各地で敗戦を重ねたそうナ。

そこでこちらと同じように古の存在を復活させて対抗しようと、救世主なる存在を知った。

各国の技術提供の結果、救世主を召喚する一回ポツキリの魔方陣を完成させ、各地で大量の救世主が召喚されたそうなの。

救世主は予想以上の戦火を見せてくれた物の、被害も当然軽くは無く、今のところ膠着状態が続いている。

そんな中、戦火の被害から一番遠く、今まで物資支援に当たっていたペルムドン王国の近隣でもグリムリバーのエインシェント・モンスターが確認された為に、ついに救世主の召喚に踏み切ったと。

こんな感じの事をすげー詳しい内容で説明された。

すごい丁寧だし、配慮もなされてたと思うんだけどさ……。

こんなもん一片に覚えきれるかボケェ!!

なんかルカ子の「私、やりましたよ」的な笑顔がスゲーム力つくし、俺が呼ばれた内容も当然ム力つく。

なのでぶっちゃけるついでにルカ子の鼻を摘まんでやった。

「ながっ!?! いたふあふあふあ!?! いふあいでふいふあいでふっ!?!?」

「あんな、なにそのすげーどうでもいい理由、俺完全に無関係じゃん。舐めてんの? ふざけてんの?」

救世主って、それ殆ど兵器だろうが。
救世主じゃねえじゃん。

「ふえい!」

「おお？」

ポコツと杖で頭を叩かれると、俺は宙を待ってベッドの上に放り出される。

ま、魔法とは卑怯な。

「……………わかっていますよ、あなた達を呼び出してしまった責任は」

「ふーん……………」

鼻を摩り涙目になりながら椅子に座り、暗い表情で語り始めるその姿に感じ取れるものがあった。

後悔、か。

……………めんどくせえなあ。

んなもん感じるくらいなら初めから呼び出してんじゃねーよ。

「おい、ルカ子」

「ルカ子！？それって私の事ですか？」

「いいか、俺はお前に言わなきゃならないことがあります」

「何故敬語」

「突っ込み無用」

コミュニケーション
とんでもなく対人関係能力に掛けるからじゃねえよ？
ビビってないからね？

「ええつとですね、私はこの世界に呼ばれたことを非常に遺憾に思っています」

「はい」

「俺にも向こうに家族がいますしね、正直これ以上休むと単位落とすから高校も休めないからすげえ帰りたいです」

「・・・あれ？言ってることがまとも？」

「おい、・・・まあいいか」

前回のあれは俺も痛いつて認めたからな。
あれなら完全に俺ガイキチである。

「けどどな？そんな立場にいる俺でもな、言うなら後悔なんてして欲しくないね」

俺が要らない子みたいだろう。

「・・・・・・・・すいません」

「あー・・・・・・・・んにゃ、そうですけど・・・・」

なんとなくどちらとも話が詰まる。

やばい、気まずいぞ。

どうしよう。

逃げたいっす。

・・・・・・・・・・・・・・・・さて、どうしたもんかね。

「あなたは・・・・・・・・覚悟が出来るんですか？」

「あん？」

ルカ子は顔をあげ、泣きだしそんな顔をしながらそれでも真剣な表情でこちらを見た。

不謹慎とか思ったりしたが、その表情はかわいいなと思ったりした。

「この世界はあなたが思っている程やさしい世界ではありません。

魔法は人を殺します。モンスターは人を殺します。そう言った者から命を掛けて人々を守ることを、私達は納得しています」

「・・・・・・・・」

「現実には容易く人を挫き、力はとても速やかに人を翻弄し、死は艶やかに人を魅せ付ける。それが間違えようも無くこの世界の在り方

で、世界の法則です」

「・・・・・・そうか」

「・・・・・・死ぬ覚悟はありますか？命を捨てる覚悟は？ゴミのよう
うにうち捨てられて消える覚悟は？誰も、あなたも名前も知らない
場所で、死ぬ覚悟はありますか？」

「・・・・・・」

大事なことを聞かれている、そう思った。
だから考えた、沢山考えた。

死ぬ覚悟？

無い。

妹も残してきた、死ねない。

止まらない覚悟？

無い。

ただのクソガキに何が出来るってんだ。

利用し利用される覚悟？

無い。

ただ摂取されるだけだろう、俺の頭じゃ。

「ないなら、私が何とかします。守って見せます、帰して見せます、
責任を果たします。ここはやさしくない、命がとても軽い場所だけ
ど、あなたの命を守って見せます」

だけど、

「私に任せといてください！」

こんなに泣きそうな顔をしている癖に、偉そうに胸を張っている小さな女にここまでさせる程、俺は自分が大切かよ？

女にここまでさせといて、今さら覚悟うんぬん抜かして逃げるのか？
・・・ならどうする？

このまま兵器として終わるのか？

冗談じゃない。

どう覚悟するべきか、ここはファンタジーだけど、確かに現実なのだから。

向こうでもそう生きてきたはずだろうに、なぜ出来ない？

・・・恐いからだ、死ぬのが恐いからだ。
なるほど、な。

それなら決まった、どうやって俺が覚悟するか。

「ルカ子、覚悟、できたぜ」

「えっ」

「ヒーローは逃げねえんだよ。戦って、立ち向かう、それが俺の憧れた姿だ」

ルカ子と同じように立ちあがって、驚いた表情の彼女に高らかに宣言した。

「俺は、不器用で、情けなくて、どうしようもなく臆病だが、この世界で、ここで、ヒーローになって見せる！」

俺の物語が、動き始めた。

二話　そ、そんな厨二を詰め込んだ世界なのか！（後書き）

こんなもんかねー

三話 訓練開始イイイイイイイイイイイイ!! 死ぬわ

「救世主様、訓練の時間です、よ……」

「はっ、ふんっ、ぬおうりゃ!」

「……」

「はいっ!とうっ!ねりゃあ!」

「………なにをやっているんですか?」

「うをつ!?……なんだルカ子か」

「その呼び方決定なんですか」

「だって名前なげーし」

「ルカ子で……」

「いいじゃん、かわいいかわいい」

「か、かわ……って、なんで裸なんですか?!」

「そらお前、スチュアートリトル大佐ごっこしてたからな」

「知りませんよ!? 誰ですか!?!」

「いや、適当。ようは一人軍隊ごっこ、設定は拷問部屋から裸で抜

け出すところ」

「本気で知りませんよ!？」

「ところでこいつを見てくれ、こいつをどう思う?」

「変態です」

「おまつ、そこは『すごく・・・大きいです』って言わんと・・・!!」

金を失うのは小さく、名誉を失うのは大きい。しかし、勇気を失うことはすべてを失う。――チャーチル

どうも、間部功刀です。
三話目からは作者もめんどくさくなってきたのでルビ振りません。
読者にやさしくない作者ですまん。

……誰に向かって説明してるんだ俺。

結局昨日の宣言をルカ子に歯牙にもかけられなかった俺は、当然の如く燃え上がり、ルカ子が去った後どうすればルカ子に認めてもらえるか必死こいて考えた。

ヒーローになるという言葉、その場のノリも手伝ったかもしれないが俺にとっても軽い気持ちで言った訳ではない。

殺しのこの字も知らん素人の言葉だし、なによりこの世界の住人からしてみれば覚悟と呼べるものでもないのだろう。

しかしそれを一蹴されると言うのは男として捨て置くことはできない。

なので俺は考えた結果、バイトがてらに鍛えていた身体を固持する為に筋トレに走った、裸で。

その内に最初の目的がスポーンと抜け、楽しくなってきたので鏡に向かって正拳突きしたり飛び蹴りしたりポーズとったりしている内に朝を迎えてしまった。

その様子をルカ子に目撃され、丁寧に説明してやったのにも関わらず、何故か魔方陣で爆破されかけた。

自分でも結構鍛えられてしまってると思うんだけどなあ。

窓から逃げ出し、昨日去り際に今日の予定と場所の指定を聞いていたので現在そこへ向かっている、裸で。

全裸で。

大切なことなので二回言いました。

凍えるなマイサン、朝立ちで気合い入れろ。

そんなこんなで指定された訓練場とやらにやってきた。

ルカ子は置いて来てしまったが、俺のヒーロー^{変態}オーラにかかれば、人の意識を引きつける事など容易い。

早朝なのでチラホラとしか確認できないが、その全員が俺をポカンと眺めていた。

やめろよ、見せもんじゃねーぞ。

そんな感じで胸を張ると、慌てて全員目を逸らした。

ちっ、つまらん。

・・・・・・・・ん？なんだあれ。

中央に何やら立て看板が・・・『救世主貸切』って・・・まんまやん。

どうやらあそこで訓練するらしい。

相手の人も既にそこにいるし、取りあえず行ってみるか。
近づくにつれ、相手の顔も見えて・・・・。

「エクセレント・・・」

すんげえ美人がそこにいた。

ルカ子は日本人の俺には見慣れない赤毛だったのだが、この人は違う。

美人外人ってこんな感じって俺の印象を裏切らないキレ目で整った顔立ち。

ボーイッシュに短く切られた金髪で緑眼、正に西洋の美人。

そんな美人が俺を（。D。）って顔で見ている。

やがて美人さんは（；。D。）ってなって俺に話しかけてきた。

「き、貴様なぜ裸なのだ!？」

ふむ・・・、中々深いな・・・。

「俺が変態^{ヒーロー}だからさ！」

ようやくルカ子が追いついた。
運動不足だな、この程度の距離で息切れとは。

「とり、あえず・・・服、着てください・・・」

「うっす」

ちょうど肌寒くなってきたところだ。

ルカ子から渡された服は柔道の道着服のような厚手で、肌触りもまだ召喚されて一日なのに懐かしく感じた。

ルカ子も来たところで、美人さんと自己紹介といきますか。

「おっす、間部功刀っす！救世主っす、おっす！」

「・・・・・・・・クネール・イヌ・ベルフェグルエだ。貴様の訓練を担当することになった。主に戦術などを教える」

「おっす！質問があります！」

「・・・なんだ」

「姦計はありますか？」

「ない」

「なん・・・だと・・・」

この世界の魔法少女は脱がないのか？
なんてことだ・・・、クネールさんは少女っぽい年齢に視えないけど。

「ルカトエーゼ、あれは本当に救世主なのか？」

「はい、残念ながら」

「・・・私はあれを鍛えなきゃいかんのか？」

「・・・はい、残念ながら」

「ねえねえ、鍛えるって何を？股間？」

「・・・」

「お察しします」

天を仰ぎ、頭が痛いと言うように目頭を押さえているクネールさん。
冗談通じねえなこの世界の人達。
つか俺裸足だった、これでやんのか？
いや、逆にこっちの方がいいのか？
うんうん俺が悩んでいると、クネールさんが諦めた表情でこちらを
見て質問する。

「何か聞いて置きたい事はあるか？」

「え、じゃあ、クネールさんの年齢は？」

「・・・・・・・・・・28だが」

「あ、結構いつてるんですね」

「・・・・・・・・・・！！！！」

ピシッと空気に亀裂が入った音がした。

あ、あれ？

もしかしながらもまズった？

「クトウとか言ったな、貴様武器を持ったことは」

「な、ないっす」

いつの間にかクネールさんの手には刃の若干厚い両手剣が握られていた、種類のにはクレイモアか？

あのサイズを片手で振り空気を裂く様に、背筋に大量の冷や汗が流れ落ちた。

「そうか、ならそのまま避け続けろ」

「え、ちょ、まっ」

なんか訓練が開始。

「ま、ちょ、ひっ、すい、ません、でし、た！」

「ほう、中々やるじゃないか」

あれどうみても真剣だよね。

キラッ☆って光ってるもんね。

あれから俺は必死にクネールさんの剣閃を避け続けていた。

何時間避けているのか、それとも何分なのか区別はつかないが、俺の足腰は確実に限界に近付いていた。

なんせここまで身体が緊張した経験は初めてだ、喧嘩とかよくしてたけどその比じゃない。

息が乱れ、肩が揺れ、顎が開く。

それに比べて奴さんは随分と涼しそうな顔だった。

くそっ、何が救世主だ。

これじゃルカ子も認めてくれねえわけだぜ。

なら、気合い入れろ俺。

ここ萎えちゃ本気で締めえだぜ。

そうやって足に力を入れ直した時だった。

「もう少し本気で行くぞ、避ける」

「え」

一步、あと一步進んでいたら、俺の首は吹き飛んでいた。しかしそれは反応できたからじゃない。

足が竦んで進めなかったからだ。

「ほう、偶然とはいえ避けてみせるとはな？ 素人にしては良い素材だ」

クネールさんがなんか言ってたけど、俺は今それどころじゃないかった。

さっきのが可愛く思えるほど大きく、心臓が跳ねた。

身体は震え、眼は見開き、歯並びが合わずにカチカチ情けなく顎が震えた。

恐怖、した。

俺は今、クネールさんの剣に、おそらく殺気も無く文字通り訓練通りに振った剣を心底恐怖した。

それだけが頭の中を渦巻いていた。

何が救世主だ、何がヒーローになるだ。

情けない、こんなにも情けない。

多分もう動けない、足が震えて動かない。

いつでもふざけてカッコ付けてきた思考は止まってしまっている。

ああ、これが、恐怖。

俺はようやく理解した。

自分はどうしようもなく矮小で、どこまで行ってもこのままなのだと。

間部功刀は、ヒーローにはなれない。

「ふざ・・・ける、な・・・っ！」

ガンッ！

俺は震えて止まらない身体を、自分の額を右手で殴りつけた。
痛み自体は大したことない、喧嘩で慣れてるから。

恐怖は、俺から逃げて行かない。

このまま立ち上がるためのモンまで持ってかれそうだ。

ゴッ！

もう一度。

ガッ！

もう一度で、ようやく止まった。

自分の顔がすごい腫れてるのが分かったが、どうでもよかった。
ふざけんな、成れる成れないじゃない。

人は結局てめえの欲望を愛すのだから。

やるかやらないかだろうが！

「いい眼だ。いいだろう避けて魅せろ」

「ヒーローは……ねえ……ねえんだよ……」

クネールさんが俺の頭を勝ち割る為にクレイモアを振り上げた。
避ける？冗談じゃない。

ヒーローは避けない。

「・・・・・・・・ふざけているのか？」

「ヒーローは避けねえ。避けねえんだよ。傷ついても、恐くても、立ち上がる」

「・・・・・・・・避けると言ったが撤回だ、そのまま眠っている」

刃が返され腹の部分でぶん殴られた。

ゆっくりと地面が近づきながら、俺の意識は暗くなっていった。

おまけ

クネール（以下ク）「まったく、面倒な奴を呼び出してくれたものだな」

ルカトエーゼ（以下ル）「……」

ク「まさか本気で振っても避けられるとはな、救世主として一だけ自分を創り替えたんだ《……》こいつ？」

ル「これは、危険ですね。国との契約だけでなんとかなるか……」

ク「一応もう一つ保険がいるな」

ル「……そうですね、姫様に打診しておきます。最終的には封印の方向になるでしょうけど」

ク「だな、素人にはこの力はキツすぎるだろう」

ル「？楽しそうですね」

ク「いやあな、こいつを自らの手で育てられると思うと叩き甲斐がある」

ル「あー……」

ク「おい、そんな目で私を見るなよ。純粹にこいつの精神力は素晴らしいぞ。単純に恐怖に勝つだけでも、私達は数年かかったじゃないか」

ル「そう・・・ですね」

ク「クククク、明日から暇しなさそうだ」

ル「・・・・・・・・大丈夫ですかねえ」

三話 訓練開始イイイイイイイイイイイイ!! 死ぬわ(後書き)

今んとこ4000ずつかー・・・。

あんま重要じゃないからなー。

5000は掛けるようになりたいなあ。

四羽 あながち間違ってない、餌的に。

「なあルカ子、あれ何よ」

「服屋ですね」

「あれは？」

「ルルっていう小動物とかと一緒にお茶を楽しんだりする甘味屋さんです」

「猫喫茶みたいなもんか。じゃ、あれは？」

「あそこはおいしいご飯が食べられるバイキングですね」

「すごいな、異世界」

「全部救世主さん達が伝えた文化ですけど、この世界でも庶民や王族にも広く伝わっているんです」

「ああ、だからさつきルル喫茶に姫様がいたのか」

「え、今なんて言いました？」

「や、だから姫様が居るって」

「……………ちょっと失礼しますね」

「あ、おい！……………行っちゃったな。な・ら！俺も隙に

動いちゃってもいいよねWWW」

「すみません今戻りました」

「はええよ」

「なんかあなたから不吉な波動を感じたんで」

「お前は俺の母ちゃんか」

「手のかかるという部分では・・・」

「マジで？」

男というのはいつもそうだが、我が家から離れている時が一番陽気なものだ。

—— ウィ

リアム・シェイクスピア

どうも、間部・・・功刀です。

今、僕は森の中で迷子です。

すごい心細いっす。

事の発端は今日部屋に来たルカ子の一言。

『今日はモンスターを狩りに行きますよ』

リアルモンスターハンターになれとのことでした。

別にそれはいいんだよ。

最初はケルビくらいだろうと思ってたし、今の俺だとシシガミ様レベルだけど。

クネール姐さんと並行してルカ子の魔法授業も積み込まれてたしな
んとかなるだろうと思ってたんだ。

しかし初めて城の外を出るという事で俺のテンションはウナギ登り
だった。

初めて見る店、初めて見る異世界の風景、街の人々の活気。

これらは積み込み勉強の受験生の心を癒してくれた。

ま、結局ルカ子に邪魔された訳だが。

モンスターハンターは樹海でやるらしいから、街を出る為に門を出
た。

街はぐるっと壁で囲まれており、樹海の中に存在しているこの国の
都市ならではの構造らしい。

んで都市門を抜けたんだが、その先にはスゲー自然が広がっていた。
富士の樹海とかならみたいない感じなんだろうが、残念ながら俺はシ
ティー育ちだ。

こんな見事な自然は見たこと無かった。

これによってリアルモンスターハンターのテンションはマックスだ。
だってホントに凄かったたんだもん。

『いやっほおおおおおおおおおおおおおっ!!』

そういう訳で解ったんだが、俺はアホだった。

結局ルカ子の静止を待たずに俺は森の中を爆走。
迷子だ。

そして、

ハアアアアア・・・

ピンチだ。

現在私はリアルモンスター軍団に囲まれています。

ウルフです、オルガロンです。

メツチャ興奮してて俺の周りを徘徊しています。

俺の手元にはさっきそこで拾った腐って苔の覆った看板。

手札は身体強化と武器。

敵はデカイ狼モンスターの群れ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

死んだな。

「初っ端からレベルを無視した敵と遭遇ってクソゲーくせえな・・・」

グルルルルルルルルルルル・・・

メツチャこええ。

逃げられんよなあ、これ。

ちよつとケツからうんこ漏れちゃった。

これ以上俺のプライド（人としての）は失われることは無い。

だから、やるだけやるだけだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおかかってこいよおおおおおおおおおお
お！！！！」

「伏せてください!!」

その声を聞いた瞬間、俺は言う通りにその場に伏せた。

何かの弾け飛ぶ音や、モンスターたちの悲鳴が聞こえた。

俺は情けないことにそれらを見る事はできなかった。

身体が震えて動けなかったから、恐くて見てられなかったから。

そうしている内に音が徐々に小さくなって行き、やがて完全に音が止んだ。

恐る恐る顔をあげると、そこには焼け焦げた狼や一部の焦土化した森。

そしてとてもホッとした顔のルカ子が居た。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

無言の重圧。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

現在俺は正座中だ。

あの後ルカ子が死体の処理とかも黙々とやっていたので俺も黙って手伝ったのだが、終了後はこのように黙って見つめられ続けられている。

意図は何となくその組まれた腕から察することが出来るので、俺はその威圧に耐えられずにその場に正座してしまった。

ていうか女の子は怒らすと恐ろしいという事が妹や母で理解してますから、黙ってその無言の指示に従った。

そうして、俺は正座している訳だが。
どないしよう。

「クトウさん」

「はい・・・」

「私はとても怒っています」

「すみません」

はい、予想通り怒ってました。

「ひとつ、遭難の危険性もあったのに勝手も解らない土地に一人で突撃したこと。ちゃんと私の指示に従ってと、勝手に動かないで下さいと言ってますよね？」

「はい・・・」

「ふたつ、正規の軍でも中隊規模で処理するモンスターに見つかるとような大声で行動していたこと。街から外はそういう世界です。個人宅でも特別な柵門が使われているんです。これも私に従ってください」

「はい・・・」

「みつつ、モンスターに囲まれたからといって素人が特攻？ありません、あなたヒーローになるんでしょう？だったら少しでも生き残れる道を探してください」

「・・・」

「まあ要するにですね・・・帰ったらみっち

り勉強し直します!!!」

「はい・・・」

そんな訳でした。

「救世主様、帰りますよ」

「・・・」

みっちりその場で叱られました。

今回は俺も悪いのですげー反省した。

こんな軽い悪ふざけが死に繋がるのがこの世界なんだ。

「救世主様？」

「あんよお・・・それやめねえ？」

「えっ？」

だからこそ、俺は言って置かなければならなかった。

これは俺の目標を正しく認識する上で必要だったから。

「モンスターに襲われた時思ってたんだ、俺は・・・弱い」

「・・・」

「この前まで、俺はただのガキだったんだ。平和なくせに不幸と嘆いて、プラスのくせにマイナスばかり数えていた、ただのガキだったんだ」

ちようどいい切り株を見つけて腰かけた。

ルカ子は俺の正面に立ち続けた。

「クネール姐さんの時も思ってたんだ。恐かった、すげえ恐かった。

だから俺はヒーローでも救世主でもない、ただの情けなくて、愚鈍で、弱々しい、唯のクソガキなんだ」

「・・・・・・・・」

「だから、俺を救世主様なんて呼ぶなよ」

ああ、なんて、愚かな。

こんなこと、ただの愚痴以外になりえないというのに。

なぜ俺はこれを口にするのを止められなかった。

こんな事言ったら、本当のヒーローに成れないかもしれないじゃないか。

なのに君は、君だけは。

「お師匠様が言ってました。この世界で最も難しい魔法は言葉だつて」

俺を、励ますというのか。

「言葉は天で渦巻く混沌を世界に下して認識させるモノです。それ故に放ってしまえば存在は確定してしまいます。だから、私達は、私はあなたの教育係だから、マナベクトウという言葉がヒーローになりたいと望めば、救世主^{ヒーロー}にだってしてあげられるのだから」

ルカ子は俺の手をギュッと握り、言葉を紡いで行く。

俺はというと、情けないことに、本当に情けないことに眼から汗が流れていた。

「私はクトウという言葉を特別にするために、あなたを教えるのです。だから、諦めないでください」

「・・・ああ」

歯を食いしばって、それだけはなんとか声に出した。

俺は弱い。

だからこそ、強く成りたかった。

でも、強くなりたいだけだった。

戦士は護る物がなければ戦えない。

矜持だろうがなんだろうが、護る物が無ければそれはただの人殺しだ。

だから俺は、ルカ子のこの決意を護ってみようと思った。

今日の遠出は、少し成長できたように思いましたまる

四羽 あながち間違っ
てない、餌的に。
(後書き)

お疲れ
)

五話 新キャラ登場です（前書き）

もう少し全体を加筆したいなあ・・・。
でも時間ない・・・。

五話 新キャラ登場です

「だりゃあ！」

「よっ」

「チェリオッ！」

「ふっ」

「チェストオッ！」

「！ほお・・・」

「ぐっ・・・ぜあ！」

「頑張りますねークトウさん（書き書き）」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお！！！」

「ああ・・・ダメだ」

「ゴハッ!？」

「あ、痛そう（書き書き）」

「お前、さっきの良かったのに」

「クネールさんも楽しそうだなあ（書き書き）」

「ぜえ・・・ぜえ・・・まだ、ま・・・だ・・・！」

「そういうのは嫌いじゃないんだが、今回はこれで時間切れだな」

「ッー！・・・ありが・・・とう・・・ざい、ましたッ・・・！（バタリ）」

「・・・・・・・・まったく、楽しい奴だな。ルカトエーゼ！」

「はいはい（ペタペタ）」

「いつもすまん。私の回復魔方陣は軽い物しか治せんし」

「困った時はお互い様ですよ、正直量が追いつきませんけど」

「その分は強くなっているさ」

「・・・・・・・・そうですね」

千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす。

宮本武蔵

地面が湿っているのが、肌触りで解った。

「ッ!!」

その瞬間バツと身体を跳ね起こした。

「きゃっ!」

「あん?」

悲鳴が聞こえ、声の主を探すと尻もち付いたルカ子だと解った。

予想していた状況と違う事態に少し戸惑うが、やがて一つの事実を理解した。

「あ、俺また気絶したのか」

「そうですよ、今治療中なので動かないでください」

「ん」

素直にその場に座り、ルカ子の治療を受ける。

治療といってもルカ子の魔方陣を身体中にペタペタ貼って貰ってるだけなのだが、この魔方陣の効能が凄いのだ。

はつきり言うとな俺の身体は全身打撲裂傷アオジントンと正にボロボロであるのだが、これだけの全身の傷を数刻で完全に治してしまうのだ。

クネール姐さんに言わせれば、『流石』らしいのだが、俺はこの世界の魔法使いはルカ子しか見ていないのでよくわからなかった。

いつもはクネール姐さんが俺が起きたら批評をしてくれた後ルカ子と勉強会なのだが、今日はどうしたことかクネール姐さんが見当たらない。

「あ、クネールさんは今日は他にもお仕事があるのでこれで上がるそうです。代わりに私が伝言で伝えというて欲しいと頼まれています」

「そっか」

あの日以来、なんとなくルカ子と話しづらい。

原因もよくわからんのだが、ふざける気が起きない。

ルカ子の前だと何となく話せなくなるのだ。

そしてそのことを不快に思っていない自分がいる。

こんなことは初めてだった。

「ええっと……『痛みや攻撃に対しての恐怖が抜けたからか動

きが良くなったが、無駄に突撃し過ぎだ。攻撃や移動のペースを考えろバカ者』だそうですね」

「昨日と同じじゃねーか」

「昨日と変わりませんからね」

「・・・・・・」

そしてルカ子の方も何となくだが、垣根が少し降りた気がする。ツツコミに容赦が無い、というより最初より遠慮が無い。喜ばしい、のだろうか。

嬉しい、と思う。

ま、考えて解らんことで俺がどうしても仕方ないか。そう思ってこのふわふわした気持ちをどこかへ放る。

「んじゃ、この次はベンきょーかー。だりいぜ」

「もう、真面目にお願いしますよ！」

少なくとも不快じゃないんだが・・・・・・、物足りないな。俺らしくねえというか・・・・・・。

変態ネタもしてないし。

そんな思いを抱えながら、俺はルカ子と共に部屋に戻った。その途中で珍客が待ち受けているとも知らずに。

「待ってたです！このブタ野郎！」

「・・・・・・・・・・」

「？何黙ってやがるですこのペド野郎！」

ルカ子と共に勉強会の行われる俺の部屋に向かっていたら、建物の屋根の上にアホが居た。

銀髪が腰に届くツインテールになっており、ネコ目な黒眼、身長はルカ子よりも高く158くらい？

あぶね、俺163だわ。

そして棚引くスカート。

「なあ、ルカ子。あのバカは何だ」

「……私の後輩で、ネリア・ブロン・クイッシュローゼという子なんです」

あ、バカは否定しないんだ。

「何ごちゃごちゃ抜かしてやがるです！はっ！そうですか、貴様今ルカ様に卑猥なセクハラ発言を働きましたですね！私にはお見通しです！」

「俺はお前のパンツしかお見通しじゃねーわ」

この高さでこの角度なら、当然の如く丸見えだった。
因み紐で黒、今夜のおかずはこれで決まりだ。
残念な体型の癖に中々大人なチョイスだな。

「っ！！？……座ってれば見えないです？」

「どうせなら降りてこいよバカ」

「くっ、貴様の言葉に従うのは癪ですが……大人しく舞ってやがるです！」

そう言ってこちらに何かを投げつけてくるツインテ。
キャッチしてみるとザルと鉢巻だった、……。ザル踊りでもやれ
ってか。

とりあえず捨てる。

「よし、行くぞルカ子」

「ええ?!」

「ツインテより俺の魔法の習得の方が重要でしょうが」

「……。はい、わかりました」

「さあああああああああああああああああせるかあああああ
あああああああああああああああああ!!!」

廊下ならでもあるような規定を大いに無視しまくった全力疾走&
急停止で俺達の前に再び現れたツインテ。
どれだけ全力を使ったのか肩で大きく息をしていた。

「よ、漸く、追いついたです」

「あ、お疲れ、これ飲む?」

「あ、どうも」

疲れた様子のツインテにさり気なく飲み物を渡してやった。
塩を大量にブチ込んだ奴を。

訓練後の為に俺が用意してる奴を強烈にした奴だ。

「ゲッハッ！ごふ！がはっ！な、なんですかこれえ・・・」

「塩水だな」

「己、貴様ルカ様に近づいて何をするぎなんでゲホッ！！」

「お前な、男と女が一つの部屋の中のことなんか決まってるんだ
ろうが」

「ッ！？」

「お勉強です！他に何もありません！」

「なんかそういう対象じゃないんだよねルカ子」

「がはっげほっ！ぜえ、認めませんです！」

咳き込みながらも自分の信念を押し通そうとするツインテ。
どうやら俺がルカ子と一緒に居る事が気に入らんようだな。
それなら対処法があるじゃないか、久しぶりに俺らしいな。

「おい、ツインテ！」

「ネリアはツインテじゃないです！」

「ルカ子を掛けて決闘を申し込む！」

「はぁっ!?!」

「ちょ、クトウさん!?!」

戸惑いの声を上げるルカ子。

すまん、今の俺の状態を現わすなら、こういうことなんだ。
俺に、俺が戻ってきた。

「受けるか？」

「……ふん、精産器の癖に決闘とは……いいでしょう、
受けるです」

「ネリアちゃん!?!」

「すみませんルカ様、だけど、引けないんです」

「奇遇だな、俺もそう思ったとこだよ」

「このブタ屑男には――――」

「この痴女には――――」

「ルカ子は渡さない！（です！）」

ニヤツと互いの顔を睨みつけ、仇敵の存在をライバルとして変質させる。

ここに、ルカ子争奪戦が決戦。

「ルールは相手の一番大事な場所に触れた方が勝ちだ！」

「なんですそのルール！？」

「だってお前強いだろ？」

感じ取れる存在がオルガロンよりも強烈なんだよね、違う意味でも。たぶん普通に喧嘩したらぜってえ勝てない。そんなわけでハンデを要求した訳だ。

「!なるほど、バカではないですか」

「ああ、ただのウンコマンだ」

因みに訓練場に引き返した、あの場でやったら通路通る人の邪魔だし。

訓練を指導してたクネール姐さんがポカンとしていた。

「俺の大切な場所は解っているな、ナニだ」

「うっ・・・!わ、わかったです」

「で、お前は？」

「へっ？」

「だあらてめえのテクニカルポイントはどこかって聞いてんだよ」

「うぐっ・・・!」

やばいこの女堪らん。
はらいたい W

「ごほっ！んんん！さて、決闘を始めようか W W W」

「うう、汚されてしまったですルカ様」

「ええゝ・・・っと、それじゃあ両者前へ」

「おっけー」

さてと、準備するか。

「ちょっと待ってください、クトウさん。なぜ脱ぐんですか？」

「え？何か問題が？」

「大在りですよ?!」

「それよりこの試合早く終わらせないと勉強の時間がなくなっちゃうぞ」

「・・・・・・解りましたよう」

しよぼしよぼと返事をするルカ子。

よし、調子戻ってるな俺。

「バ、バカじゃないですか?!」

「いいや、俺は救世主^{へんたい}だ」

「私はよく変だと言われてたですが、お前の頭は大変です!」

なんだと、失礼な。

自覚はあるけど。

「両者とも位置に着いてください。よーい、始め!」

「やってやるぜ!」

「ちよ、手をワキワキさせながらこっちくんなんです!?!」

結果。

「やあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ！！？」

「ぐもはっ！？」

パニックに陥ったツインテの強烈なボディブローが、訓練でダメージを重ねていた俺の身体を軽々と吹き飛ばし場外。
その後は泣きながら去っていくツインテ。
こうしてこの謎の決闘は終了したのだった。

「クトウさん」

「・・・・・・なんででしょう」

「不器用ですね」

「はあ？なんだよ急に」

再びルカ子のペタペタ魔方陣を貼って貰っていると、ルカ子が話しかけてきた。

しかしそれは俺の予想していた物とはまったく違いました。

何故敬語。

「女の子、実は苦手なんでしょう？」

「・・・・・・・・・・」

「3秒以上目を合わせないし、私からじゃないと絶対触れないし、何より変態的な行動セクハラはするのに傷つける行為は絶対にしませんしね？」

「うっせ・・・・・・・・」

なんで、わかるんだよ。

「先生ですから、生徒の癖は早く見つけ出さないといけないんです」

「人の心を読むな」

驚くじゃないか。

「ふふ、すいません。それでも私、本当に学校の先生だったりするんですよ？」

「ふーん」

やばい、俺今顔赤い。

でも膝枕されてるから逃げられない。

「今日は外で青空教室でもやりますか」

「……そうだな」

気持ちいいな、と素直に思った。
どちらがとは流石に言えないけど。

おまけ

ネリア（以下ネ）「今日からてめえの魔法戦闘を教える事になったネリア・ブロン・クイツシュローゼです！ むせび泣いて感謝するです！」

[illegible]

「ぜ、全裸で突っ込んでくるんです!？」

ク「昨日の続きだ！結局タツチしてないからなあ！！」

ネ「え、ちよ、まつ、こ、こっちくんなんですううううううううううう」

うづうづうう！！？「？」

ルカトエーゼ（以下ル）「・・・・・・はあ、これも姫様ですか？ 私には楽しんでる様にしか思えないんですけど、この人選」

ク「むあああああ ああああ ああああ ああああ あて ええええ
ええええ ええええ ええええ ええええ ええええ ええええ !!!」

ネ「いやあああああああああああああああああああああ
あああああああ！？」

ル「はあ……訓練、しましうよ……」

五話 新キャラ登場です（後書き）

次は短編補完だよ！

短編集的なものを突然やりたくなったんだ（前書き）

そんなわけでここまでの日常をば。

短編集的なものを突然やりたくなったんだ

クトウくんの城の中での評価

とある城に住まう衛兵。

「変態だな、でも話してみたら面白い奴だったよ」

とある街に住まう衛兵。

「変態だが、中々骨のあるやつだったよ」

とある城に住まう料理長。

「変態だ。しかし食いつぶりは気持ちがいいな」

とある城に住まう掃除係。

「変態ですね。でも、見知らぬ女性には親切ですよ。顔も悪くないです」

とある城に住まう武官。

「変態だよな、お前もそう思うだろう？ だけどクネールさんが認めるだけの根性はあるよな」

とある城に住まう文官。

「変態以外の何物でもないですね。しかし意外と仕事教えると早く覚えてくれるんですね。特に決算とか」

とある城に住まう給仕。

「顔いいのに変態ですよ。正直中々優良物件だと思いますよ、変態ですし」

とある城に住まう女性管理官。

「はい、変態ですね。で、でも少しくらいはかっこいいところもゴニョゴニョ……」

とある城に住まう教導長官。

「変態だな。もう少しあくが抜ければ育てがいがあるな」

とある城に住まうツインテールの魔術師。

「脳みそド腐れゲロ豚変態野郎です。死ねばいいです」

とある城に住まう国王。

「変態だよな。でも面白いと思うわね、だって私にデコピンした男なんて初めてだし（黒い笑顔）」

とある街に住まう店主。

「ああああああああああああああああああああ
！！？ あの変態か！？ ルカトエーゼちゃんに近づいてるあのクソ野郎か！？」

とある街に住まう青年。

「あああああああああああああああああああああああ

最も難しい事は三つことは、秘密を守ること、他人から受けた被害を忘れること、暇な時間を利用すること――――

――M・キケロ

ネリアと晚餐

「おい持ってきたぞ」

「おおー！来たですか！とつとそこに座るです！」

ツインテがバンバンと自分の隣を叩いて座る様に促してくる。
月をバックにしてみると中々シニールだ、月を叩いているように見えるから。

銀髪が月の光によく映えて、一瞬かぐや姫なんて言葉が思い浮かんだ。

「酒酒酒酒酒〜♪」

言ってることはそこらの飲兵衛な親父と変わりなかったが。

「ほれ、今日はエビチリを再現してみたぞ」

「エビチリ？なんですかそれ？」

「まあ、食ってみろよ」

「言われずともです！」

俺が手渡した皿をひったくり、旨そうに口に頬張ってゆくツインテ。その姿はとも俺の一つ下とは思えないほど子供っぽく見えた。

ま、俺が16だから当然っちゃ当然だが。

さて、何故前回の最悪の出会いから俺達が仲良く飯を食ってるかというのだ。

ある日俺がふと窓を見ると、何やら向かい側の屋根に奇妙なツインテールがすげー悔しそうに俺とルカ子を監視していた。

夜になってもその気配が消えないので、いい加減ブチ切れた俺がその屋根に向かって出来上がったばかりの身体強化で一っ飛び、ツインテに事情を吐かせた。

どうやら俺がルカ子に余計なことをしないか有給貰って監視していたようだ、暇なこって。

そしてその監視用装備をみると、いくつかの酒におつまみとカップラーメンっぽい何かという不健康極まりないラインナップ。

仕方なく俺が厨房借りて料理を作って持って行ってやったら、最初は渋っていたものの一口食べればはいこの通り大喜びで頬張る始末。そんな訳でその日から監視者気取りのツインテに毎日料理を持って行ってやることになった訳だ。

代わりに俺も酒を飲まして貰っているので、要は体の良い晚餐の理

由作りだ。

俺も妹もザルなので、結構楽しみながら飲める。
未成年だが、バイトの先輩とかに付き合わされたりした経験が役に立ったようだ。

「んー！ピリツとした味わいにプリッとした食感！やるじゃねーですか！」

「そらどーも」

バシバシと俺の背中を叩くツインテ、こいつ絡み酒だからめんどくせえんだよな。

月を眺めつつツインテと晩酌、正直微妙と言わざる得ない。

これがクネールさんとかだったらもうちょっと燃えるんだが。

ルカ子？なんかあいつそういう対象にならないんだよね、あの後もなんか会話に詰まるし。

で、ツインテだが、こいつこの年で女捨て過ぎだろってくらいだし。しない。

「くはーっ！この為に生きてるなあーです！」

こんな感じで。

確かにうまいけどさ。

俺は酒も食事も静かに食べる派なんだよ。

絡み酒超うぜえよ。

見てる分は楽しいけど。

「お前そんな恰好ルカ子に見られたらどうするんだよ」

「今の時間帯で起きてるのはお前くらいです。つたく、私の身にもなれってんです」

「知るか」

俺は確かにエロゲとかの為に寝る間も惜しんでたから某借金執事如く睡眠時間でも、今、つまり深夜でも起きてても大丈夫だけどさ。こいつの気合いの入れ方には引く。引くけど面白い奴だから付き合う。ちょっとルカ子とギクシャクしていたので、こういう気を使わない異性は俺にとって希少だしな。

「パシヤツとな☆」

「うにゃ!？」

「んふふ」

「ちょ、今何したです!？」

「んゝ何かなゝ。あれれゝこんなところに酒に目のくらんだきさな
い女が写ってるぞおゝ（C.V. コナンくん）」

「んなっ!？」

こんな感じでからかうとメツチャ楽しい。

「ぐっ……どうしたいんです……」

「んん、そうだなあ、どうして貰おうかね？」

「ま、まさか下着を!？」

「てめえの下着とか誰得だったの、俺は好みはクネール姐さんだっ
つってんだろ」

俺とこの世界に来ていたスマホに着いた紐を指に掛けてクルクル回す。

同時にニヤニヤ、声真似でC.V. コナン君。

これでムカつかない奴はいない。

最近コナン君の子供っぽくない演技にはイライラさせられるからな。
ツインテもブルブルと俯きながら拳を握っていた。

「ねえねえ、どんな気持ち？　こんな間抜け面を撮られてルカ子に見せつけられるのってどんな気持ち？」

正直、この後良くボコられるけど面白いっす。

「どうりゃあああああああああああああああああああああ
！」

「っ！これしかない！」

俺は目を見開いた。

「どうりゃあああああああああああああああああああああ
！」

あのクソ弟子の謎の機械が屋根から落ちて宙を舞うのが見え、私は躊躇わずにその身を投げ出し機械を掴みとった。それと同時に身体を包む浮遊感。

（あ、やっちゃった）

身体は女の子の自分が自ら言うときい落ち込むのだが、これなら神とも戦えると自負できるくらい丈夫だ。

だけどこんな風は無茶をすると、いつもルカ様が泣いてくれた。ルカ様を心配させちゃ駄目なのに。

ルカ様に嫌われちゃったら私は生きていけないのに。なのに、また怒られてしまう。

身体の浮遊感は徐々に地面への落下へと変わっていくのが分かる。そしてそれを自分ではどうしようもできないのも。

身体の丈夫さは神様級だが、結局神ならざる身の私は、空を飛ぶこともできないのだ。

また、ルカ様に泣かれちゃう。

嫌なのに、そんなことをさせちゃう自分も嫌なのに。

私はどうして繰り返してしまうんだろう。

ルカ様の為にやっているはずなのに、行動がいつもから回ってしまふ。

あのクソ弟子にしたってそうだ。

あいつを排除しようとしたら、ルカ様にとっても怒られてしまった。

あいつが救世主なのはわかる。

二重にも施された封印の強さを見れば一目瞭然だ。

だけど、私だってできるのに、今のあいつより役に立つのに。そのことが許せなかった。

だから姫様からあいつの魔法戦闘を鍛えて欲しいと言われた時チャンスだと思った。
これかっこつけければ、あいつをボコボコにして少しくらいは気も張れると思ったから。
なのにあいつは、

「おい、大丈夫かよ」

ムカつく程に善人だった。

あぶねえあぶねえ。

もう少しで落ちるとこだった。

にしても身体強化のバリエーションには基本とはいえバカにできない物があるな、やっぱ。

俺は今のところ身体強化しかまともに使えた試しが無いのだが、ルカ子曰く『才能がありません』らしい。

ひでえ。

それでもなんとか落下寸前のツインテの腰を掴んで足の指で屋根を挟みこんだ。

うん、これも結構ギリギリ、いやキツイ。

やっぱ俺じゃこれが限界だよね、足の腱がメツチャブルブルしてる。どうしようか。

「なんで・・・」

「あん？」

「なんでお前は・・・」

なんかツインテが話しかけてくる。

ごめん、それ長くなりそうですか？

自分で早く上がってくれないとキツイんだけど。

「なんでお前が救世主なんです？」

「しらねーよ」

あ、やべ、つい本音が。
ま、いっか。

「救世主だからってルカ様とイチャイチャしていい訳ではないです
！」

「え、俺ルカ子とイチャイチャしてたの？」

「えっ？」

「えっ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

あ、臆がそろそろ限界。

「あれをイチャイチャと言わずになんというですか！」

「いや、俺正直女の子に苦手だし。青春とかしたことないし」

「ルカ様もなんか満更でも無いしです！」

「恋愛とか解らん。初恋とかしたことないから、多分ルカ子も違
うと思うなあ」

「はっ？ ふざけてるです？」

「ふざけてねーよ。そんな風に考えていつも思い出すのはさ……」

……母ちゃん、だよな。

「……」

「だから、何黙ってんだよ。お前がんな気にするこっちゃんえだろ」

「……」

「あ、それとさあ」

「……なんです？」

「ごめんなさい」

「へっ？」

足限界。

ついに限界の訪れた俺の指が屋根を離してしまった。
そして当然の如く落下していく俺とツインテ。

[illegible][illegible]

因みかなり高い、10メートルはあると思う。

身体強化してるとはいえ俺の練度じや重傷間違いなしのレベルだな。スマホも完全粉碎かな？

もったいねー。

「ちよ、おま、もうちよつとがんばれなかつたです?!」

「うっせえよ、お前がべちゃくちや喋らずとつとと屋根に上がつてればこんなことには・・・！」

落下しているにも関わらず空中で舌戦を繰り広げる俺とツインテ。

結構余裕である。

「ま、慌てなくても私は落下しても全然大丈夫なんですけど」

「大丈夫ってあれだろ？ 周囲被害が半端ねえじゃねえか」

つかもう地面なんだけど、くそつ、こいつを下敷きにする時間がな
い！

なんとか着地するしかないか。

そう思って身体強化を今できる限界まで強度を上げた時だった。
目の前に魔方阵ができあがった。

「っ!？」

「なんです!？」

空中では身動きがとれず、魔方阵への激突は止められない。
せめてもの防御に腕を交差した時だった。

ボヨン

そんな気の抜ける感じで空中に跳ね返された。
そのまま屋根まで跳び上がりなんとか着地、事なきを得た。
急ぎ地面を見ると、あの魔方阵は既に消え去っていた。

「? 一体何だったんだありゃあ」

「まったくです。ま、助かったからよしとします」

「そりゃそうか」

「それで、これはどうするです?」

掲げたツインテの手には俺のスマホ。

「それは破壊するなりなんなりでいいわ」

「えっ？」

「えっ」

「……は？ いや、これ大事なものじゃないですか？」

「いや、俺が悪かったし、悪ふざけが過ぎたわ。すまん」

悪いことした時はちゃんと謝らんな。

ギリギリまで引っ張るけどな。

「……」

「お、酒余ってんぞ。どうするよ」

「……はあ、悩んでた自分が馬鹿みたいです」

「そうそう、悩むと白髪が増えるらしいぜ」

「銀髪だから関係ねーです」

「そらそうか」

そんな宵的一幕。

おまけ

「まったく、また無茶して。私が魔方陣書かなきゃどうなったと思ってるんですか。また2人で飲みだすし。あ、またネリアちゃんが絡んでるます。むむむむ……、何故か苛立ちます」

向かいの窓から屋根で晩酌しているバカ共を監視している魔導管理官より。

短編集的なものを突然やりたくなったんだ（後書き）

結構長く書けたな。

六話 強く成る過程は全て飛ばします（前書き）

だつてめんどくさいんだもん

六話 強く成る過程は全て飛ばします

「シッ！」

「はぁ！」

「隙ありだな」

「これをこうしてあれをこうしてああしてこう！」

「シイイイイイイイイイイイイイイイイット！！3対1なんて無理だぁ！」

「これくらいで根を上げてんじゃねーです！」

「ざけんなツインテ！てめえら最近ガチでやるじゃねえかよ！」

「リミッターは外してないからセーフだ」

「そりゃないぜクルーネ姐さん！」

「これはどうですかね？」

「火柱！？ルカ子貴様殺す気か！？」

「だって避けられるんですもの」

「避けなきゃ死ぬだろアレ！」

「最初の頃は直撃して本当に死にかけていたのに、随分と持つようになったものだなぁ」

「なぁに感慨深そうに回想しながらハルバート振り回してるんすか！？」

「いいからとっとし……避けるです！」

「死ねって言おうとしたよね！今死ねって言おうとしたよね！？」

「これはダメですかね？」

「いやぁああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

「結構余裕だよなあいっ」

自分が行動したこと全ては取るに足らないことかもしれない。しかし、行動したというそのことが重要なのである。――

――ガンディー

冒頭からも解ったと思うが、俺は訓練中だった。

だった、というのは、ツインテの拳が俺の顔面に突き刺さっているからだ。

身体のダメージは限界、つまりこれで試合終了である。

バカアン！

風船が破裂したような派手な音と共に俺の身体が殴り飛ばされた。

散々ボコボコにされてきたため、身体に支障がでるような痛みは無い。

うまく跳んで衝撃も減らせたし、受け身もなんとか取れた。

しばらくすれば回復できるだろうが戦闘は今日はもう無理。

あれから魔術の練習がてら、ルカ子からペタペタ回復魔方阵を貼って貰えなくなった。

なので痛みでばやける頭で思考しながら、回復術式のイメージを固めて行く。

前にルカ子に習ったのだが、魔法とは自然界におけるマナを活用する技術の総称で、学問としては大きく二つに分かれるらしい。

まず俺が身体に回復を促している魔術。

己の身体を媒介とし、内に秘めたマナと大気中のマナとを操る術。

魔術を使う為には強烈なイメージと才能、魔との繋がり必要な為、モンスター被害などが少ない国や地域では使える人が少ないそうだ。魔術を言い現わすなら、個人使用の格闘術と言ったところだろうか。次にルカ子が主に使う魔導だ。

これは人工的に創りだした術式回路を使って、間接的に魔法を行う

導き。

魔方阵と呼ばれる機関を創り、そこにマナを込める事で、科学的に誰でも魔法を使う事が出来る方法。

ルカ子の言っていた魔法と科学が合体した姿だ。

言うなれば、魔導師は魔方阵を創る職人だろうか。

他にもマナを活用する術は全て魔法と呼ばれるのだが、おおまかにはこの二つが一番多いらしい。

「お疲れさまでしたクトウさん」

「おう、お疲れ」

ルカ子が寝転がってる俺の隣りに現れた。

膝を着き、土に汚れるのにも構っていないようだ。

こいつ、やっぱ調子が狂うというかなんというか。

「うん、大分良くなったな。2か月前が嘘のようだよ」

「あー・・・もうそんな経ってるんすか」

この世界に来てもう2ヶ月。

これだけ経てば、向こうの方は一体どうなっているだろうか。

妹は、一体どうしているのか。

覚悟を決めた癖に、今さらながらホームシックにかかりそうな気分だけ。

「なに湿っぽい顔してんですこの変態」

こいつが居なけりやな。

実際一番俺が接しやすい異性つつたらこいつだ。

「黙れ、そして腐れ」

「んな状態で悪態疲れても悔しくもなんともないです」

なんとも腹立たしいことに、奴はわざわざ屈んで俺のほっぺを突いてきやがった。

これがクネール姐さんとかだったらわくわくなのに、目の前のクソツインテはとても意地悪くニヤニヤと笑っている、最悪だ。

「ふう、我々相手に一人で10分か、破格だな」

「逃げるだけなんです」

「それでもだよ」

うう、訓練中褒めてくれるのはクネール姐さんだけだぜ。
結構年いってるとか言ってごめんなさい。

「さてクトウ、そのままでもいいから聞け」

「え、はい」

なんだろ突然。

いつもは立つまで回復してから批評なんだが。

「で、どう思う？ 私は及第点だと思うが」

「そうですね、この少なくともそうそうは後れをとらないでしょう」

「……ムカつきますが、さっき一撃当たっちゃいましたからね。合格にしないとやるです」

あれ、なんだろう。

みんな俺の事褒めてる？

いつもは『お前後ろ向きになると動きが悪くなるんだから攻める攻めろ！』とか、『魔術は己のイメージを完成させなければ十分な存在を持ちません。だから死んでも完成させてください』とか、『魔術師名乗りたいなら周りと自分のマナを空気を吸うようにコントロールするです！ ああもう、そればっか意識してるから足が止まるんですこのグズ！』とかばっかだったのに。

やばい、ちょっと泣きそう。

でも合格とか及第点とか一体何の話よ。

ルックス？

肉つき？

それとも俺のケツ穴の緩さの改善は……されてないな。

未だにお腹攻撃されるときどき漏らすもんな。

しかも結局魔術も身体強化以外まともに使用できなかったし、・・・
・・・マジで才能ねえ。

まだ救いなのは俺が救世主としての魔力の量の多さと、身体強化の
バリエーションを全て教えてくれるだけの師がいたということだろ
うか。

これが無かったら完全に俺落ちこぼれだったな。

・・・泣けるぜ。

そんな俺が合格とは一体何のことだろうか、ホントに。

「実は訓練を終えられるかどうかの試験を受けられるかどうかテス
トしてたんです」

「マジで?」

「はい、結果は見事合格ですよ」

「・・・マジで?」

それなら、今までやってきたことは無駄じゃなかったのだというこ
とか。

俺は、また一步ヒーローに近づけるといふ事なのか。

・・・笑ってない、俺は笑ってないぞ。

「だが、勘違いするなよ?」

「ひよ?」

「もしこれに合格できなければ」

「さらに厳しい地獄くんれんが待っているという事を忘れないことです！」

ああ、そうか。

俺はもう、強くなるとか、まだまだ弱いとか、そういう環境で訓練してた訳じゃなかったな・・・。

こいつらもうホント容赦なく俺の劣等感ごとボコボコにして鍛え上げてくれた。

ツインテは別だけど、他二人にはもうなんか逆らう気がしない。

おかげ身体と逃げ足は強くなったと自負してるが、正直魔術とかは魔法関連は微妙だな。

今まで魔法の環境が無い場所から来た奴がイメージ固めろって言われてそうそうできることではない。

文字通り、常識という垣根が違う。

俺はこれをまずブチ壊さなければならなかった。

ちよっと人間的に壊れてると思っていたが、さらに壊れた。

このことに関しての説明はルカ子から説明されていたのだが、今さらビビることでもないし、めだかボックスでも人間は互いに洗脳し合ってるようなものだっつってたからそこまで抵抗も恐怖も無かった。

あるいは既に壊れ始めていたのだろうか。

ま、別にいいけどね。

この世界の常識に染まってしまっただけで永住するにしても、時々帰るくらいはできるだろうし。

魔導の方はなあゝ。

まだ字が読めないから魔方陣すら描けない。

ここは文化の違いが立ちはだかって来た。

俺の英語の成績とかはお世辞にもいいとは言えない。

そういえばなんで文字は分かんないのに会話はできるのだろうか？
.....ファンタジーでそれ考えたら終わりだな、やめようやめよう。

にしてもイイ笑顔だよな、お前ら。

ルカ子、お前がそこまで嬉しそうな笑顔初めて見たぞ。

「試験内容は明日の朝に姫様が謁見の間にて伝えるそうなので、今日はこれで終わりです」

「マジで、勉強も？」

「ええ」

それは嬉しい、身体を休める時間ができるなんていつ振りだろうか。朝から昼まで訓練、昼から夜まで勉強という生活をしてたからな。時々モンスターの駆逐とかに参加してたけど、後方で見学させられてばっかだった。

なので純粋な休みというのはこれが初めてと喋っている。ならば急いでベッドで寝たい。

身体を全力で休めたい。

うわ、一度気を抜くとドツと疲れてきたぞ。

「んじゃ、もう行っていい？」

「ええ、いいですよ。ゆっくり休んでください」

「やった」

フラフラと立ち上がる。

なんとか歩く程度は回復したようだ、これなら一人で部屋に戻るだろう。

これ以上話すのも億劫になってきたので、歩きながら手を振ってその場から離れた。

クネール（以下ク）「で、どうおもう？ あいつ」

ルカトエーゼ（以下ル）「ええ、身体の方はあの年代の人としては完成に近いと思いますよ」

ク「さんざん動き回らせたから当然だな。そこはいいんだが、問題は持って別だろ、ネリア？」

ネリア（以下ネ）「・・・正直氣にくわないですが、です」

ク「あいつは正にセンスの塊だよ、思い付きが足付けて歩いてるといつてもいいが、あいつの成長速度は目を見張るものがある。型に嵌れば伸びるだろうな」

ル「魔術の適性は低いですけど、身体強化という術への理解の早さとバリエーションへの考案は我々にはない発想がありますからね。文字はなかなか覚えられないですけど」

ネ「マナの概念を経った着込んでる最中はどうなることかと思ったんですが、意外とすんなり受け入れてものに始めてますです」

ク「中々おもしろい出来上がりになったな」

ル「あるいは、とんでもない物を目覚めさせてしまったか」

ネ「そういやクネールさんは救世主の奴と闘ったんです？ どうでしたです」

ク「・・・ああ、あれは反則だなと思ったよ。もしあのままで鍛えていれば、必ずめんどくさいことになるのは明白だったよ」

ネ「どんだけです!？」

ル「封印の方も嚴重に施してありますから、そうそうは破れないと思うんですけど、何せ救世主ですからね。世界の意志をどこまで抑えられるか」

ク「無事、合格してくれるといいんだがな。そういえばルカトエーゼ、試験の内容とは一体何だ。今のあいっなら余程なら遅れは取らんじゃないかと思うが」

ル「うーん、姫様も教えてくれなかったんですよ。明日教えるからって」

ネ「……それ、なんか怪しくないです?」

ル「……………」

ク「……………」

ネ「……………」

ク「……死ななければいいな」

ル「……いざとなったら私が止めます」

ネ「……………同情するところでしょうかです」

六話 強く成る過程は全て飛ばします（後書き）

感想がほしいです！

あとお気に入りあざーす

七話 戦地だって、やばくねえ？

「朝、四時だぜ……」

「我慢してください」

「ねむっ……」

「我慢してくださいってば」

「いやだってねみーもん、まだ深夜だろ」

「私なんて突然書類作業手伝わされて寝てないんですよ」

「お前の睡眠時間がどうかしらねーよ、俺はねみーよ」

「とにかく、謁見の間での不敬ってホントはメチャクチャ罪になるんですからね？この前みたいなのが許されたのだってクトウさんが救世主だからですよ？」

「罪深い男だぜ」

「ほんとにお願いしますよ、主に私の胃の為に」

「わーたわーた、今回は大人しくしてるよしてますでしょ」

「……本当にですね？」

「『beyond the bounds』歌ったらダメかな？」

「だーかーらー」

他人を負かすってのはそんなむずかしい事じゃないんだ・・・もつとも『むずかしい事』は！いいかい！もつとも『むずかしい事』は！『自分を乗り越える事』さ！――――岸部

露伴

「んー・・・あーう・・・？」

「姫様！起きてください姫様！」

ども、間部功刀です。

今試験内容を聞きに姫様の居るあの忌まわしき記憶が残る謁見の間にやってきたとです。

そしたら姫様含め大臣っぱい奴らまで全員コクコクと眠りこけっちゃったとです。

一体何が起こったのかわからんとです。

クトウです・・・クトウです・・・。

ネタはこれくらいでいいか、さて、ホントに何が起こったし。

寝てない大臣っぽい奴も居るが、必死に目を見開いていることから
余程眠いんだろう。

この国つてもしかしてブラック？

結構、いやかなり心配になって来た。

どうなってしまうんだろうか、俺の試験は。

この場合ってかなりヤバそうな案件を押し付けられるよな、漫画と
かだと。

リアルモンスターハンターくらいは覚悟してたけどさ、これ以上や
ばい案件って。

「あーおにいちゃん」

「何この子かわいい」

お年頃の女の子って感じの寝ぼけ姫様。

思わず鼻を押さええそうになった、中々やるじゃねえっすか。

「しけえんのほうはねえーじちゅはーぐりゅむどりあのほうとごう
どーでおねがいしてやいのー」

「うん、すっげえかわいいんだけど言ってることわかんねえ」

「!?!? どういうことですか姫様!」

「あ、解るんだ。ルカ子すげえ」

おい、読みにくい文章で読者離れとかよくあるんだから！
なんとかしろよ作者！

「グリムリバーの軍勢が北西の我が国とグルムドリアの合間の山地からやってきてるって向こうから連絡があったのよ」※実際はもっと眠そうです

「グリムリバーが！？」

「そう、グルムドリアのバカ共も遂に救世主を召喚したって聞くし、救援要請もでちゃってるから放っておけないでしょう？だからここ3日くらいは徹夜で特攻作業だったんだけど、もうちょっとかかりそうなのよね」※実際はもっと眠そうです

「だから、クトウさんに足止めをと・・・？」

「そういうこと」※実際はもっと眠そうです

「ならせめて私にも同行を・・・！」

「それは無理ね。私たちもう限界だし、貴方には軍編成の最終調整とかやって貰わないとね。なんせ初めての遭遇なんだし、極めて努めて承って慎重に微細に入り浸るまで、しっかりやっとなきやいけないんだからね」※実際はもっと眠そうです

「くっ・・・！」

読者の方々、君達は恵まれてるな。

文章変わったろ？読みやすくなったろ？

でもこっちじゃ聞きとれねえよ。なんて言ってんのかまったくわかんねえよ。

俺の話なのに俺置いてけぼりだよ。

助けてくれよ、ストレッチマン……。

ま、結局どうしたってやることは決定なんだろうからやるしかないか。

えっと、グリムリバー……聞いた事ある。これぶちのめせってか？おけおけ、任せとけ。

とりあえず未だに議論し合っているルカ子とおネム姫様に話しかけるとしよう。

「まあ、そんな焦んなよ。大丈夫大丈夫、お前らに鍛えられた頑丈さは伊達じゃねえから」

「そういう問題じゃありません、死ぬかも知れないですよ!？」

え、マジすか。

いきなり恐くなってきたんですけど。

なあんて思うと思っただか。

あめえよ、ルカ子。

この二ヶ月お前俺の何を見てきたんだ？

「今さらだろ、それ。そんなもんで一々ビビるかよ」

「でもっ」

「いいか、ルカ子」

ガシッとルカ子の肩を掴んで顔をグイッと近づける。

「強くなる為に、お前にもクネール姐さんにもツインテにも手伝わってもらった。けどな、最後の一步はてめえで歩かなきゃ意味が無いんだ。偶然でも援助でもましてや救済でもなく、ただ純粹に俺の意地と意志でな」

「・・・・・・・・」

「だから、行ってくるわ。早く追ってこいよ師匠」

「！本当に・・・気を付けてくださいね？」

「ああ、解ってるよ」

「ふふ、まるで恋人みたいね」※実際はもっと眠そうです

良いシーンで茶々を入れる姫様。

ルカ子真っ赤になって俺を突き飛ばす。

「ちちちちちち違いますよ！」

「そうだそうだ！俺は女に対して『オ○ンコ舐めてえ』とか思ったりするけどルカ子には全然そういうのがわからないし！それに恋人って近くに居るとドキドキしたりするんだろ！俺はなんかルカ子と居ると胸が苦しくてギューってなるぞ！こんなんが恋人な訳ねーだろうが！」

「へあっ？」

「あん？」

何故かルカ子から疑問符をいただく。

あれ、俺なんかおかしいなと言った？

「イチャイチャしてるとこ悪いんだけど、ホント時間無いからこれから出発ねー」※実際はもっと眠そうです

「えっ？」

この前飲みに行った衛兵さんがガシツと俺の両脇を掴む。

この人モンスター殲滅しに行った時の乱戦で助け合って仲良くなったんだけど、なんでも実験中の反魔術結界使用の鎧のテストパイロットらしく、こいつに掴まれたら魔術を発動できなくなるというチート。

名前ブライアン、イケメンだ。

「おい、ブライアン。親友を死地に送り込むとはどういうことだ、せめて貴様秘蔵の酒とか土産に渡せよ」

「すまん、これも仕事だ。秘蔵の酒は今度帰って来た時に用意してやるよ」

「包装だって大声で叫ぶぞこの野郎」

「だからごめんって、がんばって？今回マジでやばいんだって」

「・・・・・・・・ちっ、解ったよ」

軽口につき合わないくらい切迫してるのか、彼の表情にはあまり余裕が無かった。

「一体何が起こってるのやら・・・・・・・・」

覚悟は既に完了しているが。

「無人の馬車か・・・すげえ」

要人用の魔導馬車による隣国グルムドリアへの直行便。

これ揺れも少なくてしかも無人。

科学技術でもかなり手のかかる機構を、いとも容易く可能にしてしまふ魔法の力に感嘆する。

すごい、これはすごい。

楽しいなこれ。

子供みたいにそわそわと馬車を移動し、窓を覗いたり、ソファを跳ねまわったりした。

昼には着くらしいので、この国意外とでかいんだな小国じゃなかったのかと考えてふけったりと暇を潰す。

それでもその内一人の車内はかなり暇なので眠ってしまった。

そして事件は俺が起きた時に起こった。

「・・・なんだこれ」

馬車の窓にはべっとり貼り付いた何かの液体。

とりあえずナンパ野郎に身体強化で長距離ドロップキック。

「すちゃちっ！」

「でゅはあっ！」

カッコよく着地して、髪をかき上げながら少女に向き直る俺。

「フッ、大丈夫ですかマドワアゼルおわぁッ!？」

突然胸に衝撃が走り、思わずひっくり返る俺。
痛みを我慢しつつ良く見れば、少女が俺に抱きついているではないか。

しかし俺は別の衝撃によって胸に伝わる柔らかい感触とか、太ももの柔らかい感触を気にすることができなかった。

「やっぱり・・・やっぱり・・・お兄ちゃんはヒーローだよ・・・」

「・・・美衣か？」

なぜならその娘は俺の妹だったからだ。

え、何この超展開？

「將軍！あれをご覧ください！救援の烽火です！」

「……まったく、こんな時に面倒な。解った、私が行って終わらせる」

喚か。

そこまで気付いたが今さら引きさがっても許してくれなさそうだったので、俺は冷や汗かきながら偉い奴が来てくれるまで暴れまわることにした。

両手剣を避け、振り切って一瞬力の抜けた顎に掌底を叩き込んだ。

あ、またやっちゃった。

ていうかこいつら練度は悪くないんだけど焦って連携できてないのがなあ・・・、実践不足だなやっぱ。

魔術もそんなツインテみてえに人間やめてないし、あれに比べりゃ見える見える。

振り上げた瞬間に抜き手を三回叩き込んでやったぜ。

あ、またやっちゃった。

そんなことを奴等がもう数人と減るくらい繰り返した時だった。

「そこまでにして貰おうか」

なんかすごい装飾された鎧を着込んだイケメンが現れた。
漸く偉い人が来たか。

「貴様が何者かはあえて問うまいよ。今の我々には時間が無いんでな、しばらく独房で眠って貰うぞ」

「あ？それが他国の救世主に対する態度かこの野郎」

「・・・・・・・・・・なに？」

偉い人が少し戸惑ったように抜きかけていた剣を停める。

「だから、俺、救世主、よろしく」

「・・・・・・・・・・いやいやいや」

うん、まあそうだよな。

自分の国の、・・・・・・・・救世主、を奪取する為に暴れ回ってた奴が他国の救世主とか思わんな。

俺もそう思う。

「何故このようなことを？」

「こいつ、俺の妹な訳よ」

「なんと・・・・・・・・、不思議なこともあったものだ」

「で、こいつが男にセクハラを受けているのを見て思わずブチ切れちゃったと」

「・・・・・・・・・・なるほどな。いや、失礼した」

剣を鞘に戻し、こちらに頭を下げる偉い人。
それに合わせて俺も頭を下げた。

「んにゃ、俺もすいませんでした」

「何故謝るのだ？」

「いや、俺もちよつと状況にそぐわない事しちまつたし」

「……不思議な奴だ。私はグラハム・イエル・グウェスルだ、貴国の助力を有り難く思う」

「ああ、よろしく頼むわ」

ガシツと互いに握手する。

よし、これでケジメだな。

うんうん、と一人納得している時だった。

ガ
シ
ツ
！

うん？

[illegible]

「ちよつと、バカ兄貴。一体どういふ事なのか説明しなさいよ」

「ああああああああ!!? だからお前あれだよ! 戦争戦争! 多分そんな感じ!」

「はあああああああああああああああああああああああ
あああああ！？」

「いぎやあああああああああああああああああああああ
あああああ！！？」

途轍もない握力で頭蓋骨を握り潰されるのでは思うアイアンクロー。

「一体どうなってんのよおー!!」

「うぐおおおおおおおおおおお!!!」

昼下がりの真つ青な空に、妹の叫びと俺の悲鳴が響き渡った。

七話 戦地だって、やばくねえ？ (後書き)

こんな感じで投稿して行きます。

八話 戦争という名の地獄

「編隊組んでないつつつても壮観だなこりゃ」

「神の眷属か・・・」

「あれが神って面かよ。どうみても悪魔的だぞ」

「悪魔も元々神の眷属だったんだよ、この世界ではな」

「へー、てかこれだけ広い大陸だったら宗教も分かれそうなもんだが」

「文化にもそこまで違いは無いしな、流石に地域差はあるが」

「へー。っと、そろそろか」

「何か言い残すことは？」

「んにゃ、何か言い訳っぽくなりそうだし。そーさな、腹上死というものをしてみたかったな、と」

「ぶはWWWWW」

「男なら誰でも思うよな？」

「なるほど、どれ、俺も」

「うん？」

「一度、ア〇ルセックスというものをやってみたかったな、と」

「ぐは W W W W W W W W」

「どーよどーよ W W W W W W」

「最高だぜ相棒」

「団体様も歓声を上げてるぞ」

「そっか、なら」

「「いくらでもアンコール受け付けてやんぞゴラァ！」」

不幸を治す薬は、ただもう希望よりほかにない。
———
ウィリアム・シェクスピア
———

冒頭より少々遡って。

「は？まって、もっかい言って？」

「間違いは無い。これが現状だ」

「…………マジで？」

俺は愕然とした。

え、マジで？俺そんなヤバいところに居んの？

「もう一度確認の為に伝えるぞ。現在我々が駐留している街から北西より大型モンスターの群体がこちらに向かってきていることが大陸対策支部より報告された。数は約500と、大型モンスターの群体としては異常な集まりを見せた為グリムリバーのモンスターと断定。我々の戦力は200、殆どが実戦経験のない貴族のお坊ちゃん共だ」

頭が痛いとしても言うように椅子に座り込むグラハム將軍。

俺の方がいてえよ。

なんで報告と情報は正確なのに200しか引っ張ってこねえんだよ。

「上がバカでな、首都から軍を動かすのを嫌ったのだ。それで私に避難支援任務とかこってあわよくば死んでくれという指令を出してきやがった。くっそたれ」

「しらねーよ、そこ無理でも持ってこいよ」

「それでも精一杯なんだよ。表向きは避難支援だったからな」

「え、えげつねえ・・・」

こんな国俺ならグレる。

美衣をどうやってこっちに引きこんだものか・・・。

「しかも避難は最低一日かかるうえに地形は防衛に向かない平地と
きた。どう見ても詰んでる」

「ああ、そりゃ詰んでるな」

無理ゲーってレベルじゃねーぞ。

「我々だけならば、な」

「・・・ちっ、美衣はダメだ。ありゃ召喚されたばっかなんだ
ろ？なら、なんでもすっから連れて行くのだけはダメだ」

「すまん、今回はその僅かばかりの可能性にも縋りつきたい状況な
のだ」

「・・・」

「・・・・・・・・」

黙って睨みあう俺とグラハム將軍。

しかしその沈黙は話題の人物により断たれた。

「いくわ」

「っ！？てめっ、何言ってやがんだ！」

「行くわよ、私には状況はさっぱりだけど、話聞いた限りじゃ死ぬかも知れないでしょ？そこに兄貴は行くんでしょ？なら私も行くわよ」

「バカッ！お前じゃ足で纏いただけだろうが！」

「バカはどっちよ。あんまり私を舐めんじゃない。たった一人の家族が死地に行こうとしてて、それが止められないってことくらいは分かるわ。そして私は待つだけで満足する女じゃないの。足手纏いになってでも、あんたの胸倉掴んで離さない女よ」

「ぐがっ・・・・・・・・！」

くそっ、なんてこった。

こいつがこうなるとテコでもブルトーーザーでも動かねえぞ。

しかも言い返せない自分が情けない。

腕力の強さなど容易く越えてくる女という存在に俺は改めて争う事

は無駄と理解する。
つええ、女マジつええ。
しかもかつこいい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・絶対後衛か後方、これ絶対」

「いいわよ」

「グラハム、これでいいか？」

「ああ・・・」

少し笑いを堪えているグラハムにワンパンくれてやった。

場所は変わって、俺が乗って来た要人用馬車の中。
作戦を移動しながら説明とかどこの特殊部隊だよ。

「今回は少数精鋭での電撃ゲリラ戦だ。この馬車の機動力を使って敵を翻弄しつつこちらに意識を向けさせ、ペルムドン近くの谷へと向かう」

「おk、了解した」

俺とグラハム將軍、そしてグラハム將軍の部下たちが馬車の屋根で胡坐を搔いていた。

総勢5人の精鋭ね……。

美衣は数に入れねえし、単純な戦力差は100対1か。

今回はルカ子たちが俺達の信号を拾って助けてくれるまで敵を引きつける時間稼ぎ策だ。

持久戦は師匠達の熱心な訓練の甲斐あってか逃げるのは得意中の得意だ、そうそう遅れは取るまい。

「いいか、魔力を無駄にするなよ。動けなくなったら死ぬと思え」

「將軍……自分は……」

「大丈夫だってデイドル、俺達ならやれるって」

「ああ、大丈夫だ」

だから火急速やかにこの疎外感を何とかしてほしいものだ。

確かに俺は新参でしかも別勢力というチームワークを乱しかねない不安定要素だが、今回の作戦で同じ土の肥やしと成るやもしれん仲なのだからもう少し会話してくれないか。

まともに喋ってるのってグラハム將軍だけだぞ。

いや、仕事用の口調ならバイトでできるけどさ。

ここ最近訓練ばっかで軍とか男と話す機会が極端に少なくて何話していいか分かんね。

今も拳を握ったり離したりするふりをしてメツチャ聞き耳立ててる。

よし、俺もタイミングを見て参加を・・・！

「みんな、ありがとう、この戦い必ず生き残ろうぜ！」

「良く言った！」

「調子のいい奴だぜ！」

「帰ったら酒奢れよ！」

「え？」

「え？」

「え？」

「ん？」

励まし合っていた時の和気藹々とした空気が霧散し、部下の方々一斉に俺の方を見る。

それに笑顔で答える俺。

「あ、そういえば救世主様がいるんでしたね」

「全然しゃべらないから忘れてたぜ！」

「そうだね」

「よし、お前ら現地までフルマラソンな」

「敵影確認！距離約2000！」

「遂に来たか！」

「闘いの狼煙をあげろい！ヒーハー！」

こいつらの事は三バカと呼ぶことにしよう。

三バカのテンションが高くてウザい。

なんか逆に冷静になって来た。

覚悟は決まってたけど、実践はやっぱ緊張度が違うわ。

しかしグラハム將軍流石だな、さっきから目を瞑って精神統一でもしてるのかピクリもしない。

「將軍どうしますか！？」

「・・・・・・」

スクッと立ち上がって馬車の先頭で剣を引き抜くグラハム將軍。

「開戦は私が飾ろう。よく見ておけよ！」

「流石は將軍！」

「かっこいいっす！」

「そこに痺れる憧れるう！」

「おい最後の」

何故貴様がそれを知っている。

その疑問の言葉は突然のマナの異常な収束によって遮られた。

どうやらグラハム将軍が魔術の基本にして奥義が一つ、収束魔法弾を造るらしい。

将軍と言われているだけあり、その収束の仕方はルカ子の魔方陣にも見劣りしない完璧な出来だった。

少なくとも俺にはこんな芸当無理だ。

だってピンポン大の収束魔法弾すら造れなかったのだから、はあ・・・

属性はルカ子と同じ火。

階級は星の輝き級スターライトと言ったところか。

・・・・・バカじゃねえの？って言うくらい的大型魔法弾だった。

やがて収束は圧縮へと変わり、星の光が地へと降りたつ。

「逝け――――

――――
踏み砕く脚」
ティタン・ノック

夕焼けと錯覚するほどの光が放たれ、おそらく敵の居る場所へと着弾した。

それと同時に遙か先の場所から巨大な爆発が響いてきた。

臓腑を震わすその轟音は、この絶望的な闘いの中で希望とも言える光を放っていた、が。

「すまん、今の俺の魔力打ち止め」

『はあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！？』

どうやらあれは絶望へのカウントダウンの点滅だったようだ。

「ちょっ、持久戦だって自分で言っというて何してんのあんた！？」

「いいだろう！？何が電撃ゲリラ戦だよ！てめえら似非クリエイターの戦略戦術ごときが敵に通用すると思ってるのかよ！街の配置とか谷の位置とかどうなってんだよ！訳分かんねえよ！」

「バカッ！それ以上は危険だ！この作品的にも他作品的にも！」

「どうせみんな死ぬんだ！こんな詰んでる戦い作者の頭程度で切り抜けられるはずが無い！」

「グラハム將軍！ご都合主義が残ってます！」

「作者の思い通りに描かれる非現実的な展開が！」

「お前らもそこでハードルあげてやんなよ！」

ギヤーギヤーとうるさくなる馬車の天井。

これ以上は収拾のつかないメタが繰り広げられようとしていたその時だった。

「あ、將軍。今ので増援きたっばいです、前と後ろと左右から」

「囲まれとるやん」

もうだめぽ。

「よし、とりあえずさっきの攻撃で手薄になった前方にてめえらの全力を叩きこめ。極めて強引に突破する」

「じゃあ親父が持たせてくれた超高級攻撃魔方陣を」

「じゃあ俺も先祖代々から伝わる秘儀を」

「あ、なら俺も俺も」

「何このノリ」

もはやカオスである。

雷やら雷風やら竜巻やらに吹き飛ばされるグリムリバーモンスター、略してグリモン。

生き残った奴等の攻撃を何とか主に余力の残ってる俺がいなして突

破することに成功。

そのままグリモン達が俺達の後を追う形になった。

ぶっねえ！マジ危ねえ！

あんなサイクロップス共に囲まれて袋にされたら一瞬でミンチだぞ！
いなした手足がまだ痺れるっつーの！

「よっしゃお前ら！作者も今後の展開に頭を抱える排水の陣だ！気
合い入れて行くぞ！」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお！！』

でもこの雰囲気嫌いじゃないかも、ダメっぽい感じが。
グルムドリアも悪い奴ばかりじゃないかもなあ。

その後は少々の小競り合いを続けながら何とかペルムドンへと続く
溪谷へと到着したが、こちらの被害も尋常ではなかった。
現在戦力になるのは俺とグラハム將軍の2人、残りは魔力切れや負
傷によって戦闘不能となったので馬車の中に放り込んだ。
死亡者がいないのが正に奇跡だった。

「さて、どうする？ 隘路なら敵の数を制限できるが逃げられなくな
るぞ」

「俺に聞くなよ」

「そうだったな」

たく、こいつの無策のせいでえらい目にあっただぜ。
楽しかったけどさ。

なんか不思議と絶望はなかった、目の前にいっぱいいたった
からな。

もしこれを狙ったのだとしたら……いやねーな。

今も冷や汗かきまくってるもの。

隘路で……時間稼ぎ、ね。

思い付く手は一つ。

でも確実に俺達の命は保証できない。

しかし最初の戦闘で結構数が減ってるし、ここまで走らされて疲れ

てる。

頭の良い指揮官とか居なくてマジでよかった。

「……………やるかやらないか、勝つか負けるか、生きるか死ぬか。」

賭け時だな。

「おい、こんなのどうよ」

「うん……………なるほど、おもしろいじゃないか」

「おい、マジで死ぬぜこれ」

「しかし、これ以上はジリ貧だしこの馬車の魔力も尽きかけだ。もとよりこんな作戦で数人助かるだけで儲け物だぞ？」

「……………付き合ってくれるか？」

「もちろんだとも」

「無茶言うなよ、さっきから俺のテンション駄々下がりだよ」

谷に響き伝わるグリモンの群進と呻き声の嫌なデュエット。

「編隊組んでないつつつても壮観だなこりゃ」

「神の眷属か・・・」

「あれが神って面かよ。どうみても悪魔的だぞ」

「悪魔も元々神の眷属だったんだよ、この世界ではな」

「へー、てかこれだけ広い大陸だったら宗教も分かれそうなもんだが」

「文化にもそこまで違いは無いしな、流石に地域差はあるが」

「へー。っと、そろそろか」

「何か言い残すことは？」

「んにゃ、何か言い訳っぽくなりそうだし。そーさな、腹上死というものをしてみたかったな、と」

「ぶはW W W W W」

「男なら誰でも思うよな？」

「なるほど、どれ、俺も」

「うん？」

「一度、ア○ルセックスというものをやってみたかったな、と」

「ぐは W W W W W W W」

「どーよどーよ W W W W W」

「最高だぜ相棒」

「団体様も歓声を上げてるぞ」

「そっか、なら」

「「いくらでもアンコール受け付けてやんぞゴラァ！」」

そんな訳で次回に続くぞゴラァ！

八話 戦争という名の地獄（後書き）

今度ともよろしくう！

九話 戦闘描写が難し過ぎて生きてるのが辛い

「ごめんな、美衣……」

「……行くぞっ!!」

「しゃあっ!」

「塞いだあれは壊されるなよ!あの馬車が頑丈と言っても限界があるからな!」

「おう、わかったっ!」

「邪魔っ!すんなあ!」

「てめえのそのでけー肉棒粗挽きにしてやんよ!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおお!!」

「るおあああああああああああああああああああああああ
ああああああ!!」

「生きてるか!」

「生きてっぞ!」

「今通信魔方阵で連絡が入った!端的に言えば三時間だ!三時間で
救援だ!」

「了解！」

「しかし防いだ道の整理もあるからな！絶対気を抜くなよ！！」

「おう！」

「生きるぞお！」

「しやあああああああああああああああああああああああ
あああ!!!」

人間、志を立てるのに遅すぎるといふことはない。――――

――――
ボードウィン

埃をはらうように振るわれた大木と地面の隙間を滑り込んで避ける。
そのまま勢い殺さずに立ち上がると同時に走りだすと、ほんの一瞬
までいた場所に人間一人軽く踏み潰せる巨足が振り下ろされる。

振動に足を取られ転びそうになるのを堪えていると、頭上から大木が振り下ろされるのが陰でわかったので、転びそうになる勢いを利用して地面に吸い付くような体勢で何とか走る。

身体の着地を気にせず思いっきり飛んだ。

何とか大木の着弾までには握り付近に出来る隙間に飛び込むことが出来た。

急いで立ち上がり、地面から離れようとしている大木に飛びつく。

そのまま木偶の坊が大木を構えなおすまでしがみ付き、引き戻す運動が最高速に到達する瞬間に木偶の坊の顔に向かって跳んだ。

モンスターに感情があるかどうかは知らんが、かなり間抜けなツラして大きな顰められた目ん玉に、肘鉄を喰らわせてやった。

悲鳴を上げて仰け反りながら倒れる木偶の棒をクッションにして再び地面に降り立った。

ここまで、二分。

はつきり言うとかんなりギリギリ、二回は死にかけた。

おいおい、三時間以上とかマジで言ってるのか？

冗談じゃねーっつの。

こんなん三十分も持ったっつーの。

でもやってやるしかないのだ、ここで俺が倒れば、あの塞いだ道をあいつらは無理矢理でも通っていくだろうし。そうなりゃ美衣が危険だ。

「くそったれがあ！」

攻撃はもう狙えない。

あんな無理矢理な動きは俺の身体に負担をかける。

持久戦を主眼に置いているのに力尽きては本末転倒だ。

幸いにも俺の事を警戒しているのか、不気味な呻き声をあげながら

木偶の坊どもは俺を囲みつつも近づいては来ない。

このまま膠着状態が続いてくれると嬉しい、休憩入れないとマジでキツイ。

1、2、3、4、5、6、来たか。

ギリギリの最小限の動きを意識して、俺は散歩するように前に一歩踏み出すと、後ろから風。

6呼吸、十分だな。

次はバク転するように数メートル跳びあがると別の大木が通り過ぎる。

恐い恐い。

本気で恐い。

あんなもんが直撃したら、一溜まりも無くお終いだ。

いくら身体強化を施しているとはいえ、俺のは大魔力を一気に使いきるスーパースายヤ人を超えたスーパースายヤ人ではなく、効率化を図ったスーパースายヤ人2の状態なのだ。

攻撃力より機動力をとった。

九話 戦闘描写が難し過ぎて生きてるのが辛い(後書き)

続きは今夜！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5852x/>

俺、不器用ですから

2011年10月26日07時24分発行